県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業
（清水堂地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要（5）

富山市水橋

清　水　堂　南　遺　跡

２０００年３月

富山市教育委員会

県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業
（清水堂地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要（５）

富山市水橋

清　水　堂　南　遺　跡

２０００年３月

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（清水堂地区）に伴う富山市水橋清水堂南遺跡の発掘調査概要である。

2　調査は、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。なお、調査費用は「農業基盤整備事業などにかかる農林省と文化庁の覚書き」第５項に基づき、農家負担割合分についてのみ、富山市が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて負担した。

3　調査期間、調査面積は次のとおりである。

清水堂南遺跡　　平成11年５月24日～平成11年10月８日　　2,530㎡

4　調査事務局は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター（所長　藤田富士夫）に置き、文化庁文化財保護部記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導助言を受けた。

5　調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員鹿島昌也、同嘱託安達志津が担当した。本書の編集・執筆は、鹿島、安達が行い、各々の責は文末に記した。

6　調査の実施から報告書作成までの間に、次の各氏から有益な助言と指導を頂いた。記して謝意を表したい。

越前慶祐、岸本雅敏、久々忠義、高梨清志、高橋真実、西井龍儀、橋本澄夫、橋本正春、廣瀬真樹、麻柄一志、宮田進一

7　本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1) 方位は真北、水平基準は海抜高である。

(2) 座標は国家座標を使用し、南北をＸ軸、東西をＹ軸とした。

調査区は、Ｘ軸78751～78802、Ｙ軸18484～18571に囲まれた位置に該当する。図中では百の位以下で表記したもの。

(3) 遺構の表記は次の記号を用いた。

ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑

Ｐ：ピット、ＳＥ：井戸

ＳＢ：掘立柱建物、

ＳＩ：方形竪穴状遺構、

ＳＸ：不明遺構

第１図　清水堂南遺跡と周辺の遺跡（１：50,000）

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……１

Ⅱ　発掘調査の経緯……２

Ⅲ　発掘調査の概要……５

1. 調査の概要
2. 基本層序
3. 遺構
4. 遺物

Ⅳ. まとめ……27

写真図版……30

報告書抄録……40

Ⅰ　位置と環境

清水堂南遺跡は、富山市東北部の水橋清水堂地内に所在する。東は上市町、南は舟橋村に接し、平均標高は約９ｍを測る。西3.5㎞に流れる常願寺川が形成する扇状地扇端部の湧水地帯に位置する。大辻山に端を発する白岩川は、明治38年に改修されるまでは曲折しながら流れ、小規模な河岸段丘や自然堤防等の微地形を形成し、清水堂地区の傍を流れていた。川の背後に広がる沖積平野部では、豊富な水資源を利用した水田耕作が行われ、河川を利用した水運も発達していた。

白岩川の両岸をはじめ、東に流れる上市川の河岸段丘との間に形成された微高地上の平野部に、縄文早期から近世に至る多くの遺跡が所在する。清水堂地区に集落が営まれ始めたのは、縄文時代後～晩期で、多くの縄文土器や石製品と共に柱穴を検出している。

弥生時代には、中期に舟橋村浦田遺跡が見え、後期から古墳時代初期にかけては、上市町江上Ａ遺跡、富山市金尾遺跡などの集落が営まれている。

古墳時代には、白岩川本・支流域には白岩川流域古墳群と言われるような県東部の平野部では珍しい古墳群が形成される。上流部の丘陵尾根上には柿沢古墳群があり、中・下流域の平野部に至ると稚児塚（葺石・周庭帯を有する円墳）・竹内天神堂（前方後方墳）・塚越（円墳）・清水堂（円墳）・宮塚（方墳）・若王子塚（円墳）が見られる。

奈良時代には、常願寺川河口右岸に古代の官衙跡と推定される水橋荒町遺跡が出現する。また、近隣の立山町二ッ塚から舟橋村仏生寺・泉周辺は東大寺領大藪荘があった可能性が指摘されている。その南には、当該期に営まれた辻遺跡が存在し関連が注目されている。

立山町を中心とした山地縁辺部では、古代後半から須恵器生産が行われ（上末窯）、中世末から近世にかけては越中瀬戸焼の生産が隆盛する。清水堂地区においても清水堂Ｃ遺跡等から越中瀬戸焼が出土し、その消費地としての役割を担っていた。

中世後半から近世初期にかけては、小出城や仏生寺城などの城館が築かれ、池田館・的場・馬場・専光寺などの地名も残っている。（鹿島）

第２図　陸地測量部測図（明治43年）　●が調査地

Ⅱ　調査に至る経緯

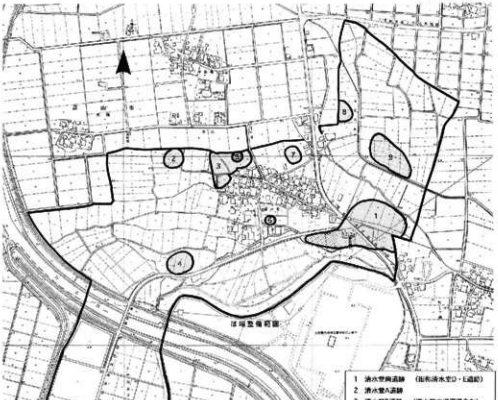
平成4年度に、富山市水橋清水堂周辺の約36㌶の水田を対象として、県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（清水堂地区）の計画が立案された。事業地内には既に周知の遺跡として５遺跡（清水堂Ａ遺跡・清水堂Ｂ遺跡・清水堂Ｄ遺跡・清水堂古墳）の所在を確認していた。一部に未調査地が残っていたため、平成５年１月に富山市教育委員会が詳細な分布調査を実施した。その結果６遺跡（清水堂Ｅ遺跡・清水堂Ｆ遺跡・清水堂小深田遺跡・清水堂宗平郎遺跡・田伏南遺跡・水橋金広遺跡）を新たに発見し、合わせて11遺跡の所在が明らかとなった。

分布調査の結果を踏まえて、富山県教育委員会文化財課・富山県埋蔵文化財センター・富山県耕地課・富山県富山農地林務事務所など関係機関との間で協議を重ね、事業が開始される平成６年度から富山市教育委員会が主体となり事前の遺跡範囲確認試掘調査・発掘調査を進めてきた。当初計画の中で予定していた農道部及び用排水路設置工事箇所にかかる発掘調査については、平成10年度までで終了している。

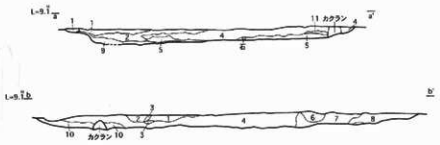
平成９年度に実施した清水堂Ｅ遺跡の試掘調査の結果、南西に隣接する清水堂Ｄ遺跡と同時期の遺構遺物を検出した。また、両遺跡間を南北に走る主要地方道立山水橋線道路下に農村下水道を通す工事立会調査においても同様の状況を確認した。よってこれらの２遺跡を１遺跡に統一し、名称を清水堂南遺跡と変更した。

平成11年度は、諏訪神社西側に面する水田部について、１段高い水田を削平し、周辺水田面高にあわせる掘削工事の計画が新たに立てられた。掘削予定地には先の試掘調査で2,530㎡に遺跡の所在を確認していた。このため、関係機関で協議を行い、盛土工法等による遺跡の保存を検討した。しかし設計高との調整が着かず、2,530㎡について発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を実施することとなった。

（鹿島）

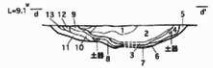


第３図　県営ほ場整備事業地内遺跡所在範囲

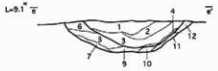


SI01 土層断面図

SD28 土層断面図



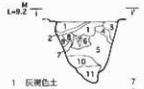
SD17 土層断面図



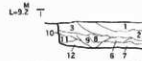
SD04 土層断面

SD06 土層断面図

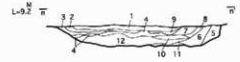
SD01 土層断面図



P32 土層断面



SD02 土層断面図



第４図　清水堂南遺跡遺構図（Ｓ＝１／200）・及び土層断面図（Ｓ＝１／80）

Ⅲ　発掘調査の概要

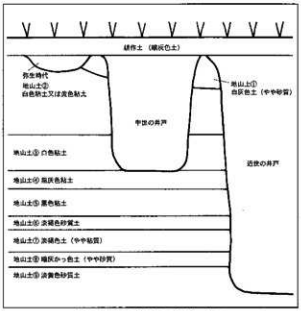
1　調査の方法

平成７年度の試掘調査（旧称清水堂Ｄ遺跡・富山市教育委員会1996）を受けて、平成11年５月24日から同年10月８日まで実施した。まず、重機による表土排土を行った。

調査区ほぼ全域に渡って表土直下に地山面が現れ、引き続き人力による遺構検出作業を行った。検出した各遺構の位置を概略図に記録し、遺構掘削、上層断面実測、出土遺物実測、写真撮影などの記録作業を行い、出土遺物は番号を付けて取り上げた。遺構の図化については遺構完掘時に写真測量を行った。遺構細部や切り合い関係のある遺構、出土遺物実測については、測量機器（トータルステーション）による測量作業を行った。（腰鳥）

2　基本層序

暗灰色土の耕作土の直下に、遺構検出面が存在する。場所によっては橙色土が薄く入る。弥生、中世、近世各時代の遺構が全て同じ面で検出される。調査区の西北側では地山第一層は白灰色土（やや砂質）である。地山の第二層は白色粘土または黄色粘土である。第三層は白色粘土で、第二層と第三層の黄色から白色を呈する粘土がかなり厚く堆積する。第四層黒灰色粘土、第五層黒色土はともに有機質の腐食した層である。第六層淡褐色砂質土、第七層淡褐色土（やや粘質）、第八層暗褐色土（やや砂質）、第九層淡黄色砂質土である。中世の井戸は比較的浅いが、近世の井戸は第九層まで掘り込むものが多い。第九層まで掘り込むと現在でも水が沸く。（安達）



第５図　基本層序模式図

3　遺構

（１）弥生時代

遺構の種類として、溝、方形周溝墓、円形周溝状遺構（円形周溝墓か？）、円形土坑、土坑、柱穴状の小ピット、掘立柱建物がある。

溝

ＳＤ16（第４図）　調査区北西隅に位置する。調査区北壁から調査区西壁に向かって直線的に調査区を横切り、さらに西に続いている。幅1.0m～1.2m、深さ0.24～0.39mを測る。覆土は、灰褐色砂質土を基調とし、下部は粘質となる。弥生土器が出土している。溝の南0.7mには後出する円形周溝状遺構の溝の北頂部が隣接している。

ＳＤ28（第４図）　調査区中央北よりに位置する。逆コ字形を呈し、両端がそれぞれ北、南に折れて終わる。幅0.5～0.6m、深さ0.2～0.3mを測る。溝の断面形はU字形を基体とするが、北側では一部V字形を呈している。覆土は灰色土を基調とし、下部は暗灰色の粘質土となる。覆土中からは弥生土器のみ検出している。周辺部に当該時期の遺構がなくほぼ単独で位置しているため、その性格は不明である。

ＳＤ36（第４図）　調査区南東隅付近に位置する。南東から北西へ向かい南西へ90度折れ終わっている。深さ0.1～0.15と浅い。灰褐色の覆土中に弥生土器の破片を検出した。ほぼ同時期と考えられる

円形の土坑ＳＫ111を切っている。

ＳＤ38（第４図）　ＳＤ36が屈折する位置から西へ3.7ｍの所から発し、南西方向へ延びる。幅1.25ｍを測り、深さ0.1～0.15ｍと浅い。覆土は灰褐色を基調とし、部分的に黄褐色土が入り込む。

ＳＤ39（第４図）　調査区北東部に位置し、北から南へ南北に延びる。幅1.6～1.7ｍ、長さ16.5ｍを測り、深さ0.1ｍ以下で非常に浅い。北端は平面形態が隅丸方形を呈する。南端は、一部近世溝（ＳＤ01）に切られており、不明である。遺構上部は、後世の耕作などにより削平を受けているものと思われる。黄褐色土を基調とする覆土中からは、弥生土器やガラス小玉１点が出土している。

方形周溝墓（第７図、写真図版３：ＳＤ19、ＳＤ20、ＳＤ23、ＳＤ31）

調査区の西部に１基確認した。一辺約８ｍ（周溝中央部で計測）、周溝外側で東西8.7ｍ、南北8.9ｍを測る。平面形態は、四隅を掘り残す形態を呈する。周溝内側に埋葬施設等は確認できなかった。

ＳＤ19（第７図、写真図版３）　方形周溝墓の東側を区画する溝で、長さ4.95ｍ、幅0.75～0.9ｍ、深さ約0.2ｍを測る。溝の南端から北へ約2.1ｍの位置に、赤彩痕の見られる壺形土器の胴部から肩部にかけての部位が逆さまになった状態で遺存していた。溝の底部から約0.1ｍ上部で出土している。壺の胴部から下は、溝自体が耕作による削平を受けているため、残存していない。

ＳＤ20（第７図、写真図版４）　方形周溝墓の西側を区画する溝で、残存長約3.5ｍ、幅0.5～0.7ｍ、深さ約0.15ｍを測る。溝の南端から、北へ約1.7ｍの位置に壺形土器が横転した状態で出土した。

ＳＤ23　方形周溝墓の南側を区画する溝で、長さ3.9ｍ、幅0.8ｍ、深さ約0.15ｍを測る。中世溝（ＳＤ19）、土坑に一部切られる。覆土は暗褐色土を基調とし、黄褐色の砂質土が混ざる。覆土中から弥生土器の破片が出土している。

ＳＤ31　方形周溝墓の北側を区画する溝で、長さ4.4ｍ、最大幅1.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。後世の中世溝（ＳＤ19）に溝の東半部上層が切られる。また、西部に井戸が形成される（時期不明）。覆土は、暗灰色土を基調とし、覆土中から弥生土器の破片が出土している。

円形周溝状遺構（円形周溝墓）

ＳＤ37（第８図、写真図版４）方形周溝墓の西約10ｍ（方形周溝墓ＳＤ31西端と円形周溝状遺構ＳＤ37の周溝外側を測る。）に位置する。直径は周溝外側で最大約11.5ｍを測り、南北にやや延びる不整円形を呈する。周溝の北西部が約1.5ｍ途切れている。溝の南東部の途切れは北から延長する可能性を残すが南側については途切れている可能性がある。溝の最大幅約1.0ｍを測る。深さ約0.08～0.2ｍと非常に浅く、耕作などによって大きく削平を受けているものと看取される。また、中世の溝や、近世の井戸跡によって途切れる箇所も目立つ。覆土は灰黄色砂質土を基調とし、弥生土器の破片が少量含まれる。

円形上坑（第４図）

ＳＫ01　調査区南東隅に位置し、直径約2.1ｍを測る。深さ約0.05ｍと非常に浅く、削平を受けている。床面の南と北の壁際に幅約0.1ｍの壁溝が見られる。覆土は、灰褐色を呈し、弥生土器の小破片が出土した。

ＳＫ111　調査区南東部に位置し、直径約2.6ｍを測る。深さ0.05以下と非常に浅く、削平を受け、さらにＳＤ36に切られている。弥生土器の小破片が出土した。

土坑

ＳＫ10（第５図、写真図版４）　調査区東部やや南よりに位置する。平面形態は北東、南北方向に軸を持つ不整形な形を取る。長軸長4.85ｍ、短軸最大幅約1.60ｍを測る。長軸と短軸方向に細い溝状の

突出部が延びる。灰色土を基調とする覆土中からは、弥生土器の他に、緑色凝灰岩剝片や、砥石等が出土している。

床面の主軸方向に浅く細い溝状に一段掘り窪められた箇所には、弥生土器の小破片が詰まっていた。

柱穴状ピット

P32（第4図）　調査区東部に位置し、長軸径0.75m、短軸径0.5mのやや長楕円径を呈する。断面形はV字形をし、深さ0.65mを測る。覆土は褐色土を基調とし、中から弥生土器片に混じって、蛇紋岩製勾玉未成品、ヒスイ・緑色凝灰岩・蛇紋岩の剝片、砥石など玉作り関連遺物がまとまって出土した。

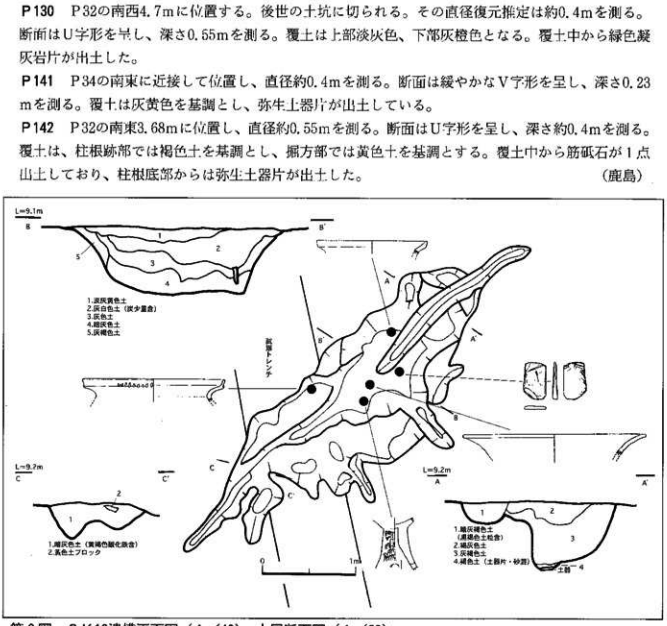
P33　P32の西南西4.35mに位置し、直径約0.55mを測る。断面U字形を呈し、深さ0.65mを測る。覆土は灰褐色土を基調とし、中から弥生土器の高杯の一部が出土した。

P34　P32の南4.65mに位置し、直径約0.45mを測る。断面は緩やかなV字形を呈し、深さ0.14mを測る。覆土は暗灰色を基調とし、上部に炭が混じる。中から弥生土器片に混じってヒスイ・緑色凝灰岩・鉄石英の剝片が出土した。

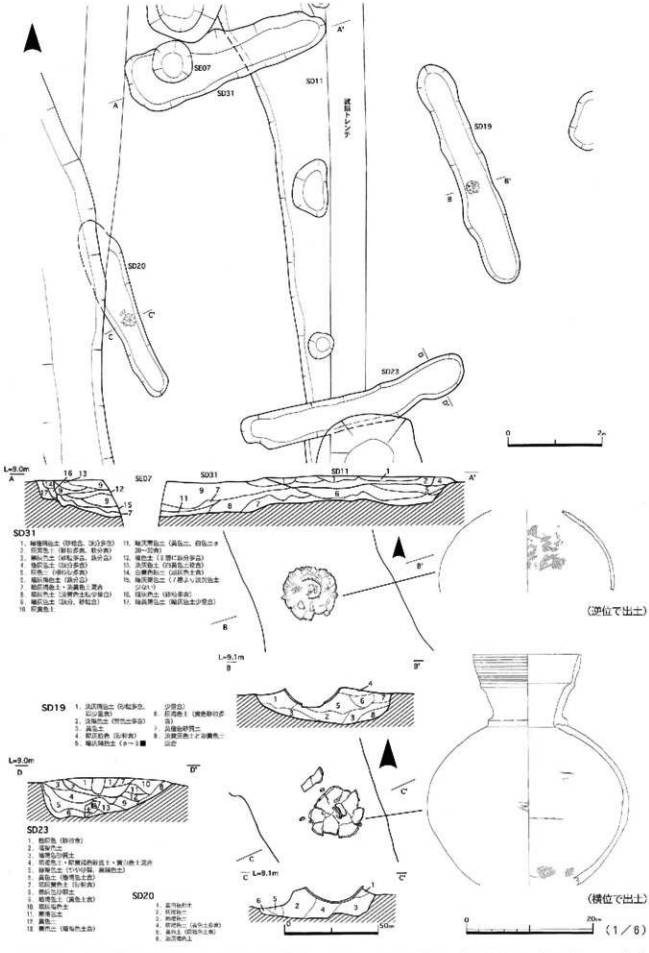
P130　P32の南西4.7mに位置する。後世の土坑に切られる。その直径復元推定は約0.4mを測る。断面はU字形を呈し、深さ0.55mを測る。覆土は上部淡灰色、下部灰橙色となる。覆土中から緑色凝灰岩片が出土した。

P141　P34の南東に近接して位置し、直径約0.4mを測る。断面は緩やかなV字形を呈し、深さ0.23mを測る。覆土は灰黄色を基調とし、弥生土器片が出土している。

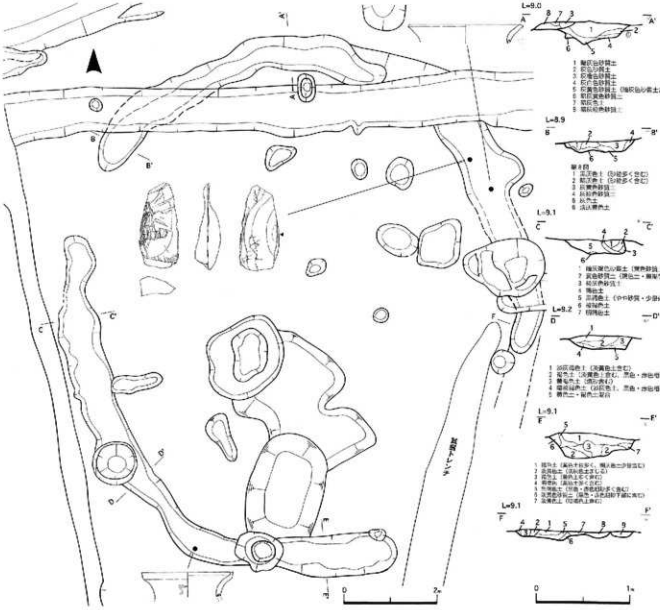
P142　P32の南東3.68mに位置し、直径約0.55mを測る。断面はU字形を呈し、深さ約0.4mを測る。覆土は、柱根跡部では褐色土を基調とし、掘方部では黄色土を基調とする。覆土中から筋砥石が1点出土しており、柱根底部からは弥生土器片が出土した。　（鹿島）



第6図　SK10遺構平面図（1／40）、土層断面図（1／20）



第７図　方形周溝墓平面図（１／80）及び弥生土器出土図（１／20）、土層断面図（１／20、１／40）



第８図　円形周溝状遺構（円形周溝墓）平面図（１／80）・土層図（１／40）

（２）鎌倉・室町時代

遺構の種類として、溝、方形竪穴状遺構、井戸、土坑がある。

溝

ＳＤ02（第４図　写真図版５）　調査区の東端から西北西に伸びる溝で、平成７年度調査で検出されたＳＤ02の延長である。今年度検出部分で長さ23.6m、幅1.7～1.8m、深さ0.2～0.3mを測る。ＳＢ03の手前でいったん切れるが、その約５ｍ先に痕跡が５ｍにわたって浅く残る（ＳＤ07）。江戸時代の溝ＳＤ01に切られる。東南東から西北西に流れる。下層には灰色シルトが堆積する。珠洲焼等が出土した。

ＳＤ17（第４図　写真図版５）　調査区西端から東へ向かい途中で東南東へと曲がる溝である。検出部分で長さ約36m、幅1.0～1.7m、深さ0.16～0.3mを測る。褐色から黒色の覆土の上層溝と灰色を基調とする覆土の下層溝に分かれる。上層溝の下部には薄く灰色シルトが堆積する。下層溝がある程度埋まった段階で上層溝を掘り直したものと考えられる。ＳＤ20、ＳＤ37を切る。珠洲焼が多く出

土した。

方形竪穴状遺構

ＳＩ04（第９図　写真図版５）　4.4m×3.7m、深さ0.36mの隅丸方形を呈する、竪穴状遺構である。ＳＩ04が埋まった後に西側３分の２ほどが掘り返されており、黄色土で人為的に埋め戻されている。ＳＥ10を切る。削平を受けたためか、立ち上がりはゆるやかな傾斜で壁といえるほどのものはない。覆土の最下層には灰色シルトが堆積する。珠洲焼、漆塗り木製品等が出土した。

井戸

ＳＥ10（第９図　写真図版５）　1.14m×1.08mの隅丸方形を呈する井戸である。深さ0.97mと浅い。ＳＩ04に切られる。0.8m×0.8mの井戸側の痕跡と、底部に直径0.4mの水溜の痕跡を検出した。また井戸側の北東角の内側に15cm×17cmの四角形の痕跡が検出され、隅柱を立てその外側に板を組んだ構造の井戸側であったことが推定される。水溜部分には曲物が設置されたことが想定されるが、井戸側、水溜ともに部材そのものは遺存していない。薄板状の木製品が多く出土している。

ＳＥ15（第16図　写真図版７）　南北推定２m×東西1.6m、深さ1.7mを測る楕円形を呈する井戸である。井戸側として曲物が積まれていた。曲げ物は井戸の下半部にのみ遺存し、４段に積まれたものと考えられる。曲げ物の遺存状態は良くない。

土坑

ＳＫ02（第10図　写真図版５）1.7m×1.9m、深さ1.2mの円形を呈する土坑である。断面は椀形を呈し、底部が一段下がる。下部から編み笊（ざる）が出土した。雨水溜めの井戸の可能性も考えられる。銅銭、箸状木製品、曲物の底板、砥石などが出土した。（安達）

（３）江戸時代

遺構の種類として、溝、方形竪穴状遺構、井戸、土坑、掘立柱建物がある。

溝

ＳＤ01（第４図　写真図版６）　調査区東部の南北に直線的に延びる溝で、延長32m、幅0.6～0.7m、深さ0.1～0.2mを測る。覆土は黄灰色を基調とし、下部に灰褐色のやや粘質の土が堆積する。遺物は越中瀬戸焼を中心にまとまった量の出土を見ている。

ＳＤ26（写真図版６）　調査区中央部の南北に直線的に延びる溝で、延長26m以上で調査区南側に続く。幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。断面形はＵ字形を呈し、覆土は灰色土を基調とする。遺物の量は少ないが、溝底部から越中瀬戸の向付が出土している。ＳＤ01と28mの距離を置いて平走している。

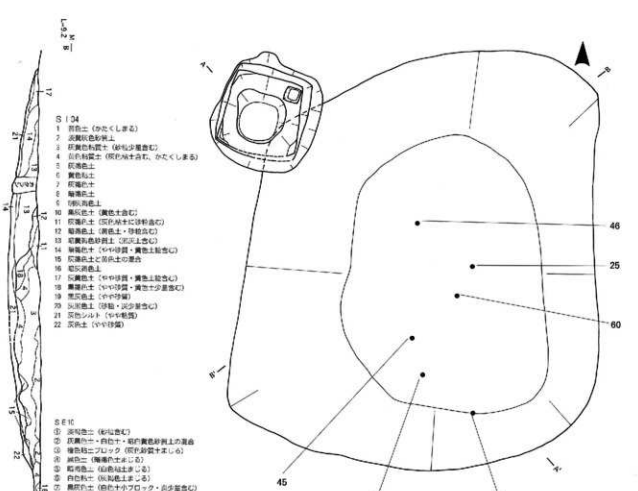
方形竪穴状遺構

ＳＩ01（第４図　写真図版６）　南北4.9m×東西2.95m、深さ約0.12mの隅丸方形を呈する方形竪穴状遺構である。覆土は灰褐色土を基調とし、中から越中瀬戸焼の椀が１点出土している他、小礫が数点出土している程度である。壁は緩やかに傾斜し立ち上がる。（鹿島）

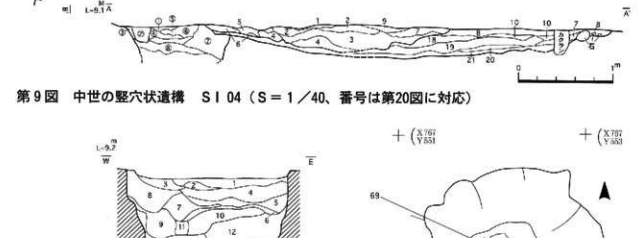
ＳＩ02（第11図　写真図版６）　南北5.6m以上×東西5.5m、深さ0.36mの隅丸方形を呈する方形竪穴状遺構である。北側は調査区外に続く。覆土の上半部は人為的埋め戻しが見られる。下半部には暗灰褐色土が厚さ10～25cmにわたってほぼ平坦に堆積する。暗灰褐色土の上部には鉄分沈着層や灰色シルトが薄く入り、この時点で一旦水に漬かったことがわかる。壁は緩やかに傾斜し立ち上がる。越中瀬戸焼、肥前陶磁器、木製品などを出土した。

井戸

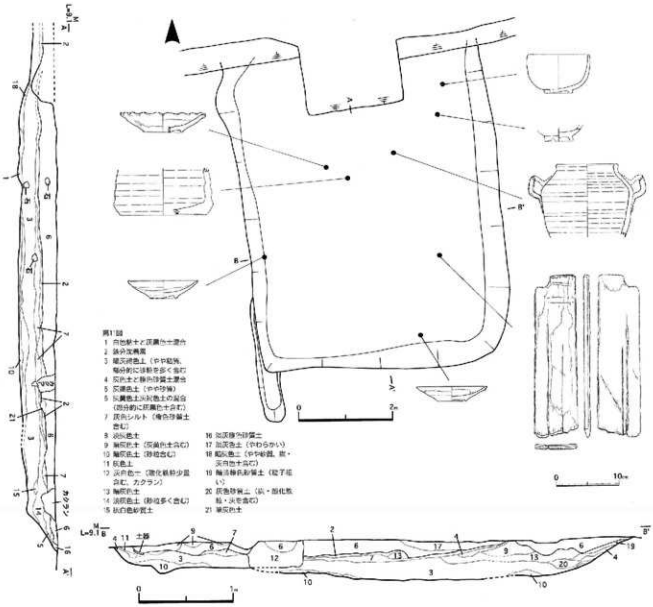
ＳＥ09　南北1.9m×東西2.１m、深さ2.3mの井戸である。ＳＥ16を切る。上半部で越中瀬戸焼を多



第９図　中世の竪穴状遺構　ＳＩ04（Ｓ＝１／40、番号は第20図に対応）



第10図　ＳＫ02　内遺物出土状況及び土層断面図（Ｓ＝１／40、番号は第20図に対応）



第11図　近世の竪穴状遺構　ＳＩ02（８＝平面図Ｓ＝１／80、土層断面図Ｓ＝１／40、遺物図Ｓ＝１／６）

く出土した。

ＳＥ11　南北1.4m×東西1.1m（推定）、深さ約2.3mの井戸である。当初ＳＥ12と区別することが出来なかったが、下層においてＳＥ12を切ることが判明した。遺物の出土量はあまり多くない。越中瀬戸焼の中皿などを出土した。

ＳＥ12（第14図、写真図版８）　南北1.25m×1.4m（推定）、深さ約2.1mの井戸で、ＳＥ11に切られる。中層において小礫が多く出土、下層上半部からは越中瀬戸焼が多く出土した。特に匣鉢（さやばち）の蓋が10点出土したことが特筆される。ＳＥ09、ＳＥ11、ＳＥ12ともに地山の淡黄色砂質土（第５図基本層序参照）まで掘り込む深い井戸である。（安達）

ＳＥ13（写真図版７）　南北1.3m×1.25m、深さ1.07mの断面Ｕ字形を呈する井戸である。下層部は、底部に掘られた直径約０.６mの水溜を灰青色砂質土と白青色粘土ブロックで埋め、壁際に白色粘土や橙色土が入り、中央部付近は灰黒色土が被せられていた。中層部は灰黒色が堆積し、礫も見られる。上層部は灰黄色土を基調とした堆積で、多くの小礫に混じり遺物が廃棄されていた。

ＳＥ14（第16・17図、写真図版７）　南北1.35m×1.3m（推定）、深さ約1.63mを測る。井戸側に石組みを用いる井戸である。上層部東肩をＳＫ96に切られる。上層部は灰褐色土を基調とする堆積を確認し、一部ハサ穴による縦穴が掘られている。遺構上面から中層上部にかけて小礫が密に入り、それより下に石組みが残存していた。上層部は井戸側の石が抜かれており、何点かは井戸内に落ち込んだ状態で検出されている。井戸側残存部上面の内径は0.7mを測る。井戸中層付近に、石臼を半裁したものが２点井戸側に転用され填め込まれていた。２点はそれぞれ別個体である。井戸の最下層部には、井戸側に用いられている石よりもかなり大きな石が入れられていた。（鹿島）

ＳＥ20　南北0.78m×東西0.71m、深さ約1.1mの円形を呈する土坑である。ＳＤ40に切られる。壁ははぼ垂直に立ちあがる。小型であまり深くはないが井戸と考えられる。礫や越中瀬戸焼がかなり密に出土した。

ＳＥ21（写真図版８）　南北0.75m×東西0.8m、深さ約1.0mの円形を呈する土坑である。ＳＥ20と同じような形状で遺物の出土状況も似通っている。（安達）

土坑

ＳＫ120（第13図、写真図版６）　長軸4.0m、短軸3.5mの南北に延びる長楕円形の平面形態を取る。断面は擂鉢状の形態を取り、底部までの深さ約0.8～0.85mを測る。土坑が埋まっていく過程で多くの遺物が廃棄されている。（鹿島）

ＳＫ45　南北2.2m×東西2.5m、深さ0.8mの円形を呈する土坑である。断面形は擂鉢形を呈する。上半部から礫や越中瀬戸焼が多く出土した。

掘立柱建物

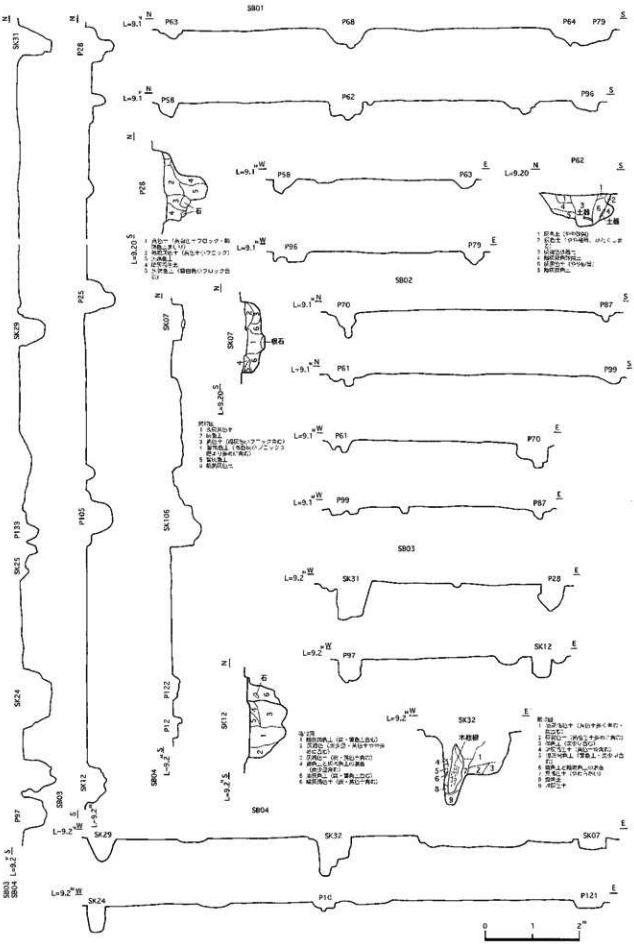
ＳＢ01（第４・12図）　桁行２間、梁間1間の南北棟である。方位はＮ－10°－Ｗ。建物規模は桁行が東筋で9.05m、梁間は北筋で3.9mである。柱間寸法は桁行東筋で3.85m、5.20m、西筋で3.70m、5.15m。梁間は全て3.9mである。柱穴が重複していることから建替えが行なわれたようである。

ＳＢ02（第４・12図）　桁行１間、梁間１間の南北棟である。方位はＮ－4.3°－Ｗ。建物規模は桁行5.6m、梁間4.3mである。柱間寸法は、桁行は全て5.6m、梁間は全て4.3mである。

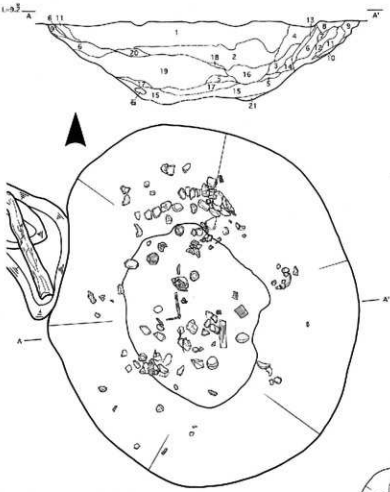
ＳＢ03（第４・12図）　桁行３間、梁間１間の南北棟である。方位はＮ－4.2°－Ｗ。建物規模は桁行西筋で16.3m、梁間は北筋で4.25mである。柱間寸法は桁行が不揃いで、東筋で北から5.5m、4.6m、5.95mである。梁間は4.0mから4.25mの間である。少なくとも１回の建替えが行なわれている。

ＳＢ04（第４・12図）　桁行２間、梁間２間の東西棟である。方位はＮ－4.5°－Ｅ。総柱建物である。建物規模は桁行北筋で10.45m、梁間東筋で8.55mである。桁方向南側に近接してある２筋は建て替えによるものと考える。この２筋は柱穴掘方の規模が小さいことから廂部分と考えられる。柱間寸法は桁行北側柱筋で西から4.8m、5.65m、南端筋で西から4.9m、5.45m、梁間東側柱筋で北から4.1m、3.5m（南端柱穴までは4.5m）、西側柱筋で北から4.1m、3.15m（南端柱穴までは3.95m）である。P105がＳＫ108を切っていることから、ＳＢ04が廃絶した後にＳＢ03が建てられたと言える。

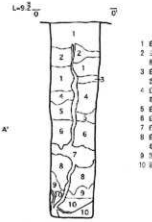
噴砂跡（第15図）　ＳＥ19の断割りを行なった際に断割坑の北壁に地震による噴砂の跡を検出した。ここでは噴砂の発生源の層までは掘り下げることができなかった。他の地点での基本層序の確認の際にはさらに下まで掘下げているが噴砂の白色砂質土の層は確認されていないため、それよりも下の層から噴出したものと思われる。遺構覆土の断面にはかかっていなかったため、遺構を切っているかどうかは不明である。調査区内の地山上面には噴砂の跡は確認されていない。（安達）



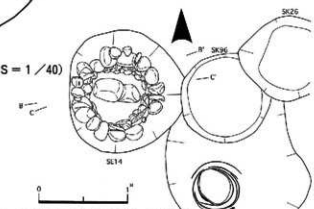
第12図　近世の掘立柱建物ＳＢ01、ＳＢ02、ＳＢ03、ＳＢ04（Ｓ＝１／80、柱穴土層断面図はＳ＝１／40）



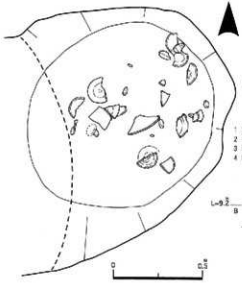
第13図　ＳＫ120　土層断面図および遺物出土状況図（Ｓ＝１／40）



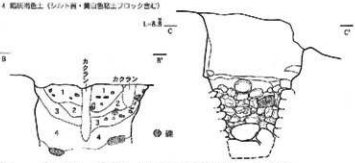
第15図　噴砂跡土層断面図（Ｓ＝１／40）



第16図　ＳＥ14周辺遺構平面図（Ｓ＝１／40）



第14図　ＳＥ12　遺物出土状況図（Ｓ＝１／20）



第17図　ＳＥ14　上層土層断面図（Ｓ＝１／40）

4　遺物

(1) 弥生時代

方形周溝墓出土の遺物　1は二重口縁の大型壺形上器である。ＳＤ19のほぼ中央部に横転し、下になっていた部分だけが残存していた。頸部の付け根に段を持つ。幅5.7cmを測る口縁に７条の擬凹線文を施す。外面は粗いヘラ磨き、内面は刷毛目を施す。体部と頸部の接合部で割れていた。弥生時代終末期に属する。２は壺形上器の頸部から大部上半部分である。ＳＤ20のほぼ中央部に頸部から上を欠き、倒立した状態で出土した。上になっていた部分（体部下半部分）は削平により失われていた。外面はヘラ磨きを施し、一部炭素を吸着し黒色を呈している。内面は刷毛目調整を施す。内外面の摩滅が激しい。僅かながら外面に赤彩の痕が観察される。

円形周溝墓出土の遺物　３は受け口状の口縁を持つ壺である。外面に刷毛目を施す。４は壺である。口縁端部に面取りを行う。外面は摩滅しており、調整方法は不明。内面は口縁端部付近にヘラ磨きが認められる。10は安山岩質の横剥ぎの剥片である。刃の部分は欠損している。

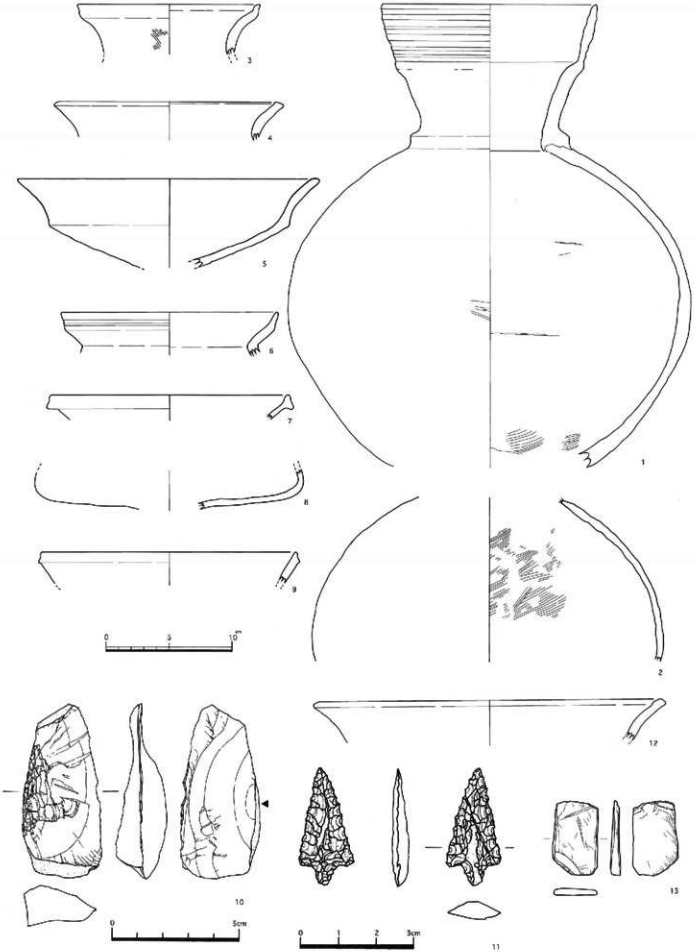
溝出上の遺物　５は高杯である。器面は摩滅しており調整方法は不明である。６・７はＳＤ36出土の甕である。６は口縁部に凹線が二本入る。７は口縁端部を三角形状に膨らませ、斜め下に突出する。８はＳＤ38出土の結合壺である。器面の摩滅が激しい。９はＳＤ38出土の甕である。外面に煤が付着する。11はＳＤ06出上の有茎石族である。石材はチャートである。長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。両面からの交互押圧剥離を施す。縄文時代後期から弥生時代にかけて存在するものである。

上坑出上の遺物　12はＳＫ03出土の高杯の杯部である。口縁部をやや膨らませ、横撫でを施す。13から18はＳＫ10出上の遺物である。13は珪質粘板岩製の砥石である。比重は2.34を測る。14はＳＫ10出土の壺の口縁部で、狭い口縁帯を有する。15は有段口縁の甕である。近江系受口状口縁部外面下部に連続する刻み目を施す。16は「く」の字状口縁を有する甕である。16は口縁端部外側下部に連続する刻み目を施す。17・18は高杯である。17は有孔の脚部で、外面にヘラ磨きを施す。18は杯部で内外面ともヘラ磨きを施す。

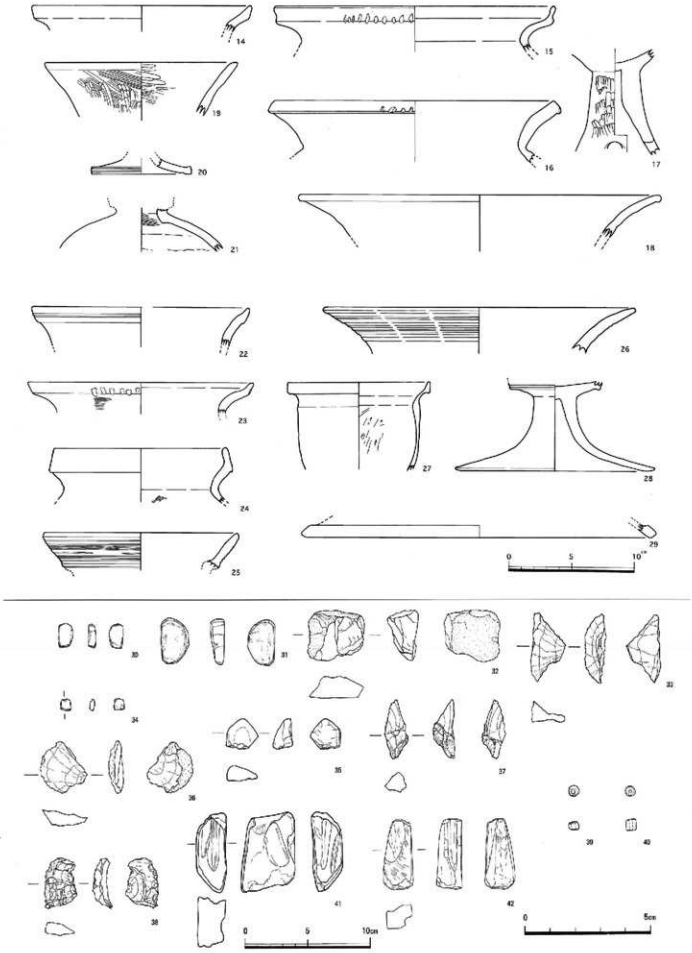
掘立柱建物出土の遺物　19・20はＰ81出土の遺物である。19は壺の口縁部で刷毛目調整の後、ヘラ磨きを粗く施す。20は赤彩台付壺の脚部である。端部には細かい凹線が施され、その部分に赤色顔料が残る。21は長頸壺で外面はヘラ磨きを施し、赤彩されている。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。20・21は月影式期に属する。

弥生時代以外の遺構から出土した遺物　22は器台で外面に凹線がはいる。23はＳＥ22出土の甕で、受口状口縁部外面に刻み目を施す。24はＳＫ55出土の甕である。内屈する口縁部の下端が垂下する。25はＳＩ04出土の赤彩の壺か鉢の口縁部である。外面に細かな沈線が入る。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施す。26はＳＫ107出土の壺で外面に沈線が入る。27はＳＫ120出土の小型の甕である。内面はヘラ削りを施す。外面は器面が摩滅している。28はＳＥ09出土の高杯である。脚部の裾が大きく発達し外側に広がる。「東海系」の特徴が見られる。　（鹿島・安達）

玉作り関連遺物　31はヒスイの勾玉未成品である。全面が磨かれ、擦痕が認められる。背の部分には微かながら稜線が残る。この後、腹の部分を抉るように磨き、穿孔した後にさらに全体に磨きをかけて完成する。30は緑白色を呈する蛇紋岩製の勾玉未製品である。全体に細かな擦痕が認められる。背の部分にはかなり明瞭な稜が残る。32はヒスイの小型片割品である。古い擦理面が３面にあり、これを利用して割ったものである。緑色の部分がかなり多い。33はヒスイの剥片である。２面に自然面が認められる。表と裏は反対方向から打撃が加えられている。石核から薄い剥片を一枚ずつ剥ぎ、好みの大きさにしていく過程で出た剥片と思われる。34は緑白色の蛇紋岩の未成品である。先頂部に



第18図　弥生時代の遺物実測図１（10　S＝２／３、11　S＝１／１、他は１／３）



第19図　弥生時代遺物実測図（14～29、41・42　S＝1／3、30～40　S＝2／3）

No.	遺構	層位	縦(mm)	横(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	形状	遺物No.	備考
1	P32	上層	9.50	5.50	2.88	0.27	蛇紋岩	勾玉未成品	30	ほかに5mm未満の緑色凝灰岩チップ7片 蛇紋岩チップ1片 緑色系石材チップ2片出土
2		上層	4.44	4.21	2.00	0.06	蛇紋岩	未成品(穿孔途中破損)	34	
3		上層	11.19	7.65	3.21	0.14	緑色凝灰岩	剝片		
4		上層	6.35	4.74	3.15	0.06	緑色凝灰岩	剝片		
5		上層	8.48	6.65	2.72	0.08	緑色凝灰岩	剝片		
6		上層	6.43	5.31	1.80	0.02	緑色凝灰岩	剝片		
7		上層	7.74	4.83	2.17	0.04	緑色凝灰岩	剝片		
8		上層	18.16	7.31	3.72	0.29	緑色凝灰岩	剝片		
9		上層	7.37	5.08	1.71	0.03	緑色凝灰岩	剝片		
10		中層	16.01	11.72	2.24	0.21	緑色凝灰岩	剝片		
11		中層	11.61	7.75	5.21	0.36	ヒスイ	剝片		
12		中層	8.47	6.25	3.95	0.13	緑色凝灰岩	剝片		
13		中層	8.72	7.56	2.33	0.08	緑色凝灰岩	剝片		
14		中層	6.19	4.05	2.39	0.05	緑色凝灰岩	剝片		
15		中層	5.77	5.38	0.65	0.01	緑色系石材	剝片		
16		下層	18.84	8.74	3.48	0.36	緑色凝灰岩	剝片		
17		下層	12.06	10.51	3.28	0.23	緑色凝灰岩	剝片		
18		下層	9.91	6.05	2.66	0.10	緑色凝灰岩	剝片		
19		下層	8.68	6.57	2.80	0.11	緑色凝灰岩	剝片		
20		下層	9.22	5.50	3.39	0.09	緑色凝灰岩	剝片		
21		下層	7.27	7.01	2.01	0.04	緑色凝灰岩	剝片		
22		下層	7.12	5.04	2.74	0.05	緑色凝灰岩	剝片		
23		下層	14.03	8.37	1.71	0.12	緑色凝灰岩	剝片		
24		下層	15.87	10.18	7.64	0.94	緑色凝灰岩	剝片		
25		下層	11.70	4.85	2.91	0.13	緑色凝灰岩	剝片		
26		下層	8.24	7.27	2.99	0.25	ヒスイ	剝片		
27		下層	9.08	6.91	2.48	0.09	緑色凝灰岩	剝片		
28		下層	9.09	7.31	2.05	0.08	緑色凝灰岩	剝片		
29		下層	14.06	10.03	2.50	0.26	緑色凝灰岩	剝片		
30			11.36	8.71	6.71	0.95	蛇紋岩	剝片		
31			9.86	8.85	1.94	0.07	緑色凝灰岩	剝片		
32			13.62	10.33	3.18	0.24	緑色凝灰岩	剝片		
33			9.54	6.18	2.18	0.10	緑色凝灰岩	剝片		
34			7.04	4.95	1.57	0.03	緑色凝灰岩	剝片		
35			7.52	4.45	1.79	0.04	緑色凝灰岩	剝片		
36			5.30	4.82	1.52	0.03	緑色凝灰岩	剝片		
37			10.01	8.03	6.18	0.43	緑色凝灰岩	剝片		
38	P34	上層	8.02	5.33	1.26	0.02	緑色凝灰岩	剝片		ほかに5mm未満の緑色凝灰岩チップ11片 ヒスイチップ6片 鉄石英チップ1片 緑色系石材チップ3片出土
39		下層	12.30	6.27	3.35	0.25	緑色系石材	剝片		
40		下層	7.58	3.32	1.42	0.01	緑色凝灰岩	剝片		
41		下層	5.17	3.08	2.22	0.02	蛇紋岩	剝片		
42			7.87	5.11	3.76	0.13	緑色凝灰岩	剝片		
43	P130	上層	19.80	13.00	5.15	1.52	メノウ	剝片	38	
44			9.70	8.41	2.32	0.14	緑色凝灰岩	剝片		
45	P142		20.50	18.50	5.23	1.65	蛇紋岩	剝片	36	ほかに筋砥石出土
46	SD02		12.18	8.58	3.34	0.48	緑色凝灰岩	剝片		
47			27.50	13.50	7.77	1.93	ヒスイ	剝片	33	
48	SD36		23.50	9.30	7.66	1.13	鉄石英	剝片	37	
49	SD38		12.00	12.50	7.75	1.44	蛇紋岩	源石荒割品	35	
50	SD39		3.13	4.18		0.07	ガラス小玉	平玉形	39	スカイブルー 孔径1.3mm～1.5mm
51	SK10		8.12	5.38	1.48	0.05	緑色凝灰岩	剝片		ほかに5mm未満の緑色凝灰岩チップ2片出土
52		最下層	15.13	11.02	4.34	0.41	緑色凝灰岩	剝片		
53	SK33	上層	34.00	25.90	11.75	7.49	鉄石英	荒割品		
54	SK47	上面	20.25	14.44	5.61	1.53	鉄石英	荒割品		
55	SK120		18.00	11.00	5.62	1.93	ヒスイ	勾玉未成品	31	
			20.50	22.50	11.97	7.05	ヒスイ	片割品	32	
56	SE15		24.50	16.90	13.02	6.94	タンバク石	剝片		
57	諏訪神社境内表採		4.20	4.00		0.09	ガラス小玉	円筒形	40	スカイブルー 孔径1.0mm～1.2mm
58	包含層		11.68	8.81	5.65	0.53	鉄石英	剝片		

表1　玉石材計測表

初期穿孔痕跡が見られるが未貫通のまま割れたものである。孔の断面形はじ字形を成す。破断面のほかは研磨痕がある。35は淡緑色の蛇紋岩の漂石である。2面の打割り面を残す。36は明緑色の蛇紋岩剥片である。自然面が一部に残る。37は鉄石英の剥片である。小さな打撃を何回か加えている。38はメノウ剥片である。39・40はガラス小玉である。40は調査区の東側に位置する諏訪神社の境内で表面採集したものである。39は平玉形、40は円筒形を呈する。色はともに明るいスカイブルーである。41・42は凝灰岩の筋砥石である。41は、細く深い溝状の研磨痕が2条ずつ2面に、幅広で浅い研磨痕が1面にある。42は細く深い溝状の研磨痕が1条と、幅広で浅い研磨痕が1条ある。平らな部分にも擦痕が多くみられる。（安達）

（2）古代から室町時代

溝出土の遺物（第20図：53・54－ＳＤ02、57・58－ＳＤ17）

53は中世土師器の非ロクロ成形の皿で、口径12cm高さ2.7cmを測る。口縁端部を部分的に面取りを施す。13世紀後半に位置付けられる。54は珠洲焼の甕の口縁部である。端部を鋭く外屈させ垂下する古手の甕の口縁形態をなす。焼成が甘かったためか内面が白色化している。57、58は珠洲焼の片口鉢である。57は水平口縁をなし、卸し目は一単位幅2.5cmで14条の櫛歯原体を用いて施されている。58は口縁内端に幅1.5cmの面を取る。一置単位2.6cm幅で8条の卸し目を施す。

竪穴状遺構出土の遺物（第20図：45・46・51・60・61・62－Ｓ104）

45、46は須恵器の杯Ａで平安期の遺物で混入品である。51は中世土師器の非ロクロ成形の皿である。60は片口鉢で、口縁部は外傾し方頭を呈する。卸し目が11条観察されるが、欠損しているため正確な単位は不明である。61、62は珠洲焼の甕の体部である。61の外面には平行叩きが、62の外面に綾杉状叩きが観察される。

井戸出土の遺物（第20図：52－ＳＥ06、65－ＳＥ05、66－ＳＥ10）

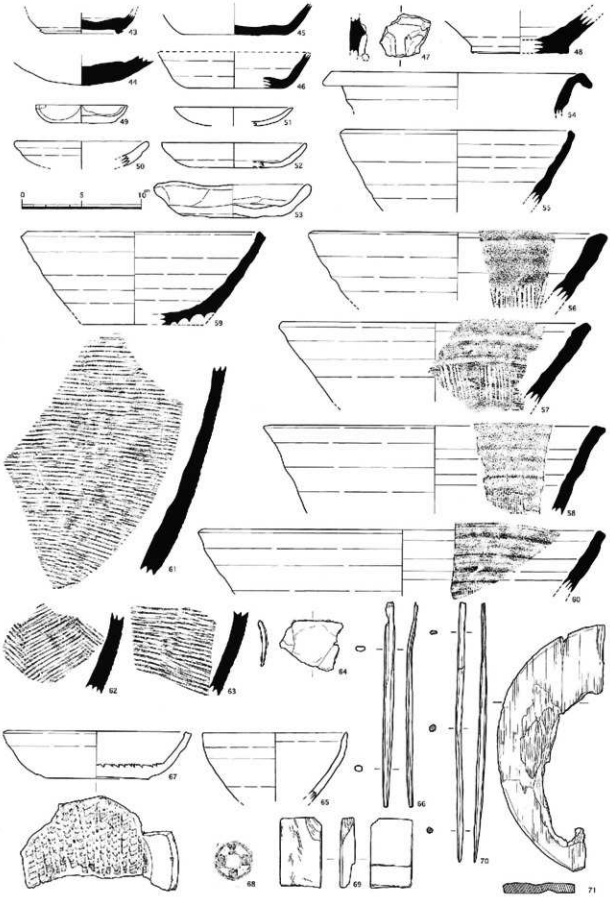
52は中世土師器の非ロクロ成形の皿である。65は古瀬戸の天目茶碗である。66は箸状木製品である。最大長17.2cm、最大幅0.8cmを測る。一端を斜めに加工して先端を作り出している。

土坑出土の遺物（第20図：43・44－ＳＫ45、49・50－ＳＫ22、48・56・63－ＳＫ67、55－ＳＫ108、64－ＳＫ20、67～71－ＳＫ02）

43は須恵器の杯Ｂである。44は須恵器の甕の底部である。いずれも平安期のものと思われ、混入品であり、ＳＫ45は近世期の遺構である。49は中世土師器の非ロクロ成形で平底の皿である。口径7.6cm器高1.5cmを測る。口縁部付近に油煙が付着し、ススも付着しており灯明皿として使用されていた。13世紀後半期のものである。50は中世土師器の非ロクロ成形の皿である。48は珠洲焼の底部である。復原底径が約8cmと小さい。56は珠洲焼の片口鉢である。やや太目の櫛歯原体によって卸し目が11条観察されるが、欠損のため正確な本数は不明である。63は珠洲焼の甕の体部で外面に平行叩きが施される。55は珠洲焼の片口鉢である。口縁端部は外傾し面を取っている。遺構上面から出土しており、ＳＫ108からは他に越中瀬戸焼も出土している。64は鉄片である。67は**古瀬戸**の卸目付き皿である。灰釉が施され、底部糸切り痕を残す。68は銅銭で「皇宋通寶」（北宋銭1038年初鋳）である。69は砥石で、厚さ約1cmと薄い板状のものである。片面が剥離している。70は箸状木製品である。最大長21.6cm、最大幅0.5cmを測る。一端を斜めに加工して先端を作り出している。71は曲げ物の底板で、残存長20.5cm、最大厚0.9cmを測る。

包含層出土遺物

47は双耳瓶あるいは四耳壺の耳部が取れたものである。（鹿鳴）



第20図　古代～中世の遺物実測図（68　S＝1／2、他は1／3）

(3)近世の遺物

溝出土の遺物（第21図：72－SD26、73～76・98－SD01）

72～77は越中瀬戸焼である。72・74は鉄釉内禿の向付である。体部下半はロクロ削り、削り出し高台である。74は内面に釉止めの段がある。73は褐色を呈する鉄釉の椀である。口縁端部が重焼によって欠けている。75・76は鉄さび釉の壺である。77は褐色を呈する鉄釉の鉢である。内禿げであるが自然釉であろうか、内底面に薄く灰釉がかかる。高台部分は露胎である。

98は黒色粘板岩製の円板である。径1.9cm、厚さ0.5cmo。打撃によって薄く剥いだ後側、面を打ち欠いて円板状に仕上げている。遊戯に使ったものと考えられる。

井戸出土の遺物（第21・22図、78－SE02、79～85・132－SE09、86－SE11、87～89－SE12、90・91・95－SE13、92・93・96・97－SE14、94－SE15、107－SE19、99－SE20、101～106・108－SE21、100－SK26、114－SK42）

78～84・86～95は越中瀬戸焼である。78は鉄釉の小皿で、口縁の内外面に施釉される。底部は回転糸切り未調整である。79・80・87は匣鉢の蓋である。79は両面回転糸切り未調整で内面に重焼の痕跡がある。80は内面に輪トチンが付着している。87は内面回転糸切り未調整で外面はロクロなでによって仕上げている。81・91は鉄釉の向付で、体部下半はロクロ削りを施す。81は内面に釉止めの段がある。削り出し高台である。82は黒色を呈する鉄釉の椀である。高台部分は露胎である。83は無釉の杯である。底部は回転糸切り未調整、体部は内外面ともロクロなでによって仕上げる。84は匣鉢である。底部は回転糸切り未調整で炭化物が付着している。体部外面下部にへこみがある。内面底部には直径約5.3cmの重ね焼痕跡が見られる。90は灰釉、94は鉄釉の丸皿。2点とも体部下半はロクロ削りを施し、削り出し高台である。94の内面に重ね焼痕跡がある。86は鉄釉の中皿である。釉薬の発色はよくない。外面には黄白色の釉も付着する。内面には4種の印花文と中央に「大吉？」の押印文がある。92・88は鉄釉の水滴である。92は外面に黄白色から黒緑色を呈する釉を掛け流す。89は白色釉の大皿である。火を受けた痕跡がある。内面には目跡が4ヶ所残る。93は白色釉の輪花皿である。89・93とも内面は全体に釉がかかる。95は鉄さび釉の擂鉢である。

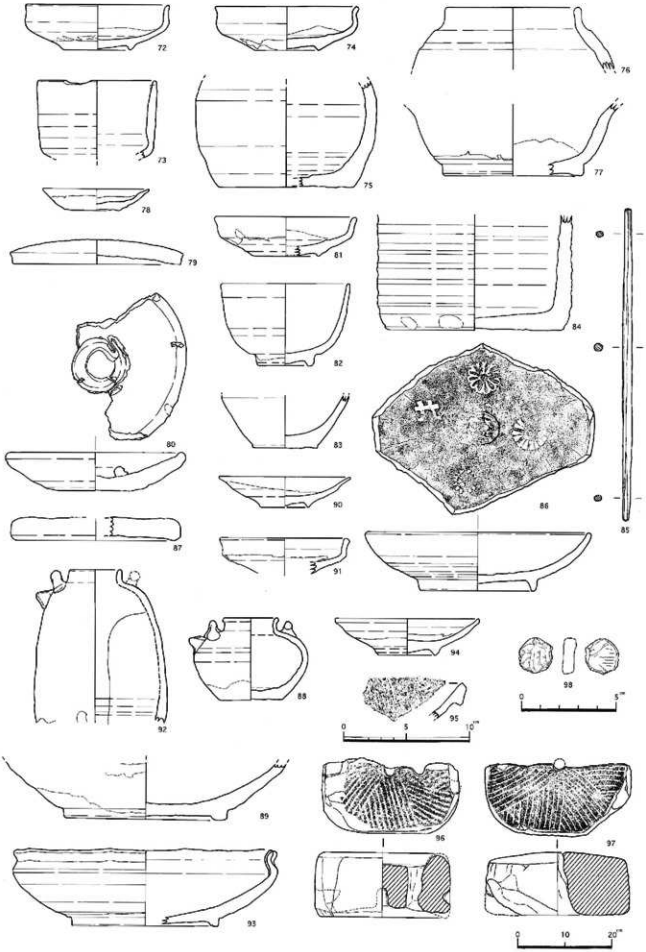
85は箸状木製品である。96・97は石臼で石組み井戸の井戸側に転用されていた。96が上臼で直径約29cm、97が下臼で直径約31cm。2点とも破損前に火を受けた痕跡がある。96は挽き木の穴が2ヶ所ある。97はすり合わせ部分がかなり磨耗している。芯棒の穴は上部と下部が磨耗しており、中ほどは石の加工痕が明瞭に残る。

99～108・114は越中瀬戸焼である。99は鉄釉の椀で内面に暗緑色から黒色を呈する釉を掛け流す。底部は削り出し高台である。101・102は灰釉の丸皿である。102は内面に重ね焼痕跡があり、口縁部は薄手である。103は鉄釉の向付。内面は全体に施釉された後底面を蛇の目状に釉をぬぐっている。100は鉄釉の徳利で外底面付近は露胎である。底部は回転糸切りである。底部付近に煤が付着していることから火を受けたようである。104は褐色を呈する鉄釉の鉢である。削り出し高台で内面全体に施釉した後、底面部分の釉をぬぐっている。105は鉄釉の壺である。底部は回転糸切り未調整である。底部以外は全体に施釉する。106は匣鉢で内面に直径5.7cmの重ね焼痕跡がある。107は鉄釉折縁皿。体部下半ロクロ削り、削り出し高台である。108は黄白色の釉がかかる中皿である。内面は全体に施釉し、目跡が残る。114は鉄釉のひだ皿である。底部内面が黒ずみ滑らかに磨耗する。

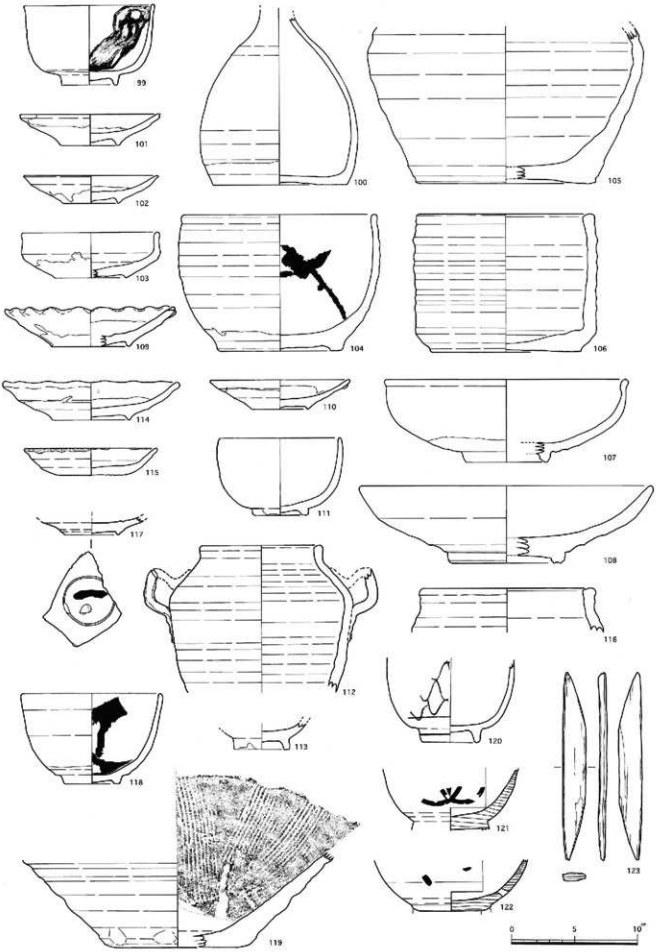
132は鉄製品で刀子である。

竪穴状遺構出土の遺物（第22図：111～114－SI02）

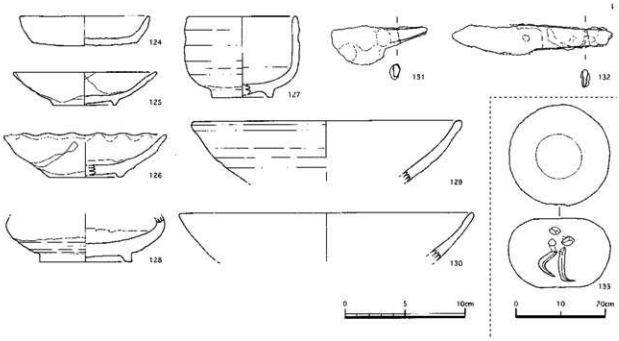
109～113は越中瀬戸焼である。109は鉄釉のひだ皿で内面全体に施釉した後蛇の目状に釉をぬぐっ



第21図　近世の遺物実測図１（72～95　S＝１／３　98　S＝１／２　96、97　S＝１／８）



第22図　近世の遺物実測図２（Ｓ＝１／３）



第23図　近世の遺物実測図３　（124～132　Ｓ＝１／３、133　Ｓ＝１／８）

ている。その部分に重ね焼痕跡が残る。110は鉄釉の丸皿で口縁部外面と内底面に重ね焼き痕跡が残る。

111は褐色を呈する鉄釉の椀である。112は把手付きの壺、いわゆるかね鉄鉢（おはぐろ）壺である。113は肥前陶器の緑釉椀である。

土坑出土の遺物（第22図：115・116－SK45、117～123－SK120）

114～123は越中瀬戸焼である。115は無釉の小皿である。口縁部には油煙が付着し、内面にも煤が付着している。灯明皿として使用されたものである。116は鉄さび釉の壺口縁部である。117は鉄釉の丸皿で外底面に「一カ」の墨書がある。内面には重ね焼きの痕跡がある。削り出し高台である。118は褐色鉄釉地で内面に黒緑色の釉を流しかける椀である。119は鉄さび釉の擂鉢で、卸目は１単位10本である。120は伊万里焼の椀である。網目文を施す古伊万里である。121・122は漆塗りの椀である。黒地に赤漆の文様が入る。122は体部に穿孔がされている。123は加工された木製品で、両端を斜めに切る。用途は不明である。

掘立柱建物出土の遺物（第23図：124－SK35、125・126・128・129－P62、127－P102、130－P105、133－SK29、131－SK89）

124は型作りの上師質の皿である。125～130は越中瀬戸焼である。125は灰釉と鉄釉を掛け分ける丸皿である。126は鉄釉内禿げのひだ皿である。内面にゆるやかな釉止めの段がある。内面中央に押印文の一部らしきものがある。127は黒色を呈する鉄釉の椀である。128は鉄釉の鉢である。内面に重ね焼きの痕跡がある。129は白色釉の中皿で口縁端部がやや肥厚する。130は鉄釉の中皿である。131は鉄製品である。図の右側は柄に装着する部分と思われる。刃部がさらに長かったかどうかは不明である。133は五輪塔の水輪である。「バン」の梵字が刻まれる。（安達）

表２　清水堂南遺跡主要遺構別出土品一覧表

遺構番号	出土遺物
SE01	弥生土器、須恵器(甕)、土師器、土師質土器、礫
SE02	須恵器、土師器(椀・皿)、土師質土器(小皿)、越中瀬戸焼(小皿)、礫
SE04	弥生土器、須恵器?、炭、礫
SE05	弥生土器、須恵器(壺)、土師器(甕)、古瀬戸(天目茶碗)、被熱礫、礫
SE06	弥生土器、須恵器(杯)、土師質土器(皿)、礫
SE07	弥生土器(甕)、加工材、加工木柱、竹、礫
SE09	弥生土器(高杯・赤彩高杯)、須恵器(瓶)、珠洲焼(甕・片口鉢)、越中瀬戸焼(丸皿・皿・折縁中皿・向付・碗・杯・擂鉢・壺・瓶?・匣鉢・匣鉢蓋)、鉄製品(刀子)、斧状木製品、板状木製品、砥石?、被熱礫、礫
SE10	弥生土器、土師質土器(皿)、板状木製品、棒状木製品、加工材、梅ｏｒ桃の種子、礫
SE11	珠洲焼(片口?鉢)、越中瀬戸焼(丸皿・中皿・匣鉢蓋)
SE12	弥生土器(赤彩壺?・高杯)、須恵器(甕)、珠洲焼(甕・壺・片口鉢)、土師質土器(皿)、唐津焼、越中瀬戸焼(丸皿・折縁皿・皿・大皿・向付・碗・擂鉢・壺・水滴・匣鉢・匣鉢蓋)、染付?、板状木製品、竹片、礫
SE13	弥生土器、須恵器(有高台杯)、越中瀬戸焼(丸皿・中皿ｏｒ大皿・向付・擂鉢、匣鉢蓋)、白磁、砥石、被熱礫、礫
SE14	弥生土器、須恵器(壺)、珠洲焼(甕、鉢)、土師質土器(灯明皿)、越中瀬戸焼(丸皿・中皿・折縁皿・向付・碗・瓶・徳利or壺・擂鉢・匣鉢)、唐津(鉢)、染付、石臼、礫
SE15	弥生土器、珠洲焼(甕・片口鉢)、土師質土器?、越中瀬戸焼(丸皿・壺)、タンパク石被熱礫、礫
SE16	弥生土器?、珠洲焼(甕)、越中瀬戸焼(丸皿・擂鉢)、被熱礫、礫
SE19	弥生土器、越中瀬戸焼(中皿・折縁皿)、礫
SE20	弥生土器、越中瀬戸焼(丸皿・皿・碗・匣鉢・匣鉢蓋)、礫
SE21	弥生土器(甕・高杯)、珠洲焼(甕)越中瀬戸焼(丸皿・中皿・向付・鉢・壺)、伊万里焼(皿)、砥石、被熱礫、礫
SE22	弥生土器(壺)、須恵器(甕)、珠洲焼(壺)、土師質土器?、加工材、礫
SK01	弥生土器(高杯)、青磁、炭
SK02	弥生土器、須恵器、古瀬戸(卸皿)、銅銭、砥石、薄板、箸状木製品、曲物底板、編みザル
SK03	弥生土器(壺)
SK04	弥生土器
SK07	弥生土器、柱根石
SK10	弥生土器(甕・壺・高杯)、緑色凝灰岩剥片、砥石、貝殻、炭、礫
SK12	被熱礫
SK17	弥生土器、土師質土器(皿)
SK20	弥生土器、珠洲焼(甕)、鉄製品、鉄塊、板片、被熱礫
SK21	弥生土器、礫
SK22	弥生土器、須恵器、土師器(椀・小型甕)、珠洲焼(甕)土師質土器(小皿)
SK26	越中瀬戸焼(徳利)、炭、礫
SK29	五輪塔水輪、礫
SK31	礫
SK33	弥生土器、珠洲焼(片口鉢)、越中瀬戸焼(丸皿)、鉄石英荒割品、礫
SK35	弥生土器、土師質土器(皿)、越中瀬戸焼(壺把手)
SK36	石製?加工品
SK41	礫
SK42	珠洲焼(片口鉢)、越中瀬戸焼(丸皿・擂鉢・壺)近世陶磁、骨片、被熱礫、礫
SK45	弥生土器(甕・高杯)、須恵器(有高台杯・甕)、珠洲焼(片口鉢)土師質土器(小皿)、越中瀬戸焼(丸皿・擂鉢・壺)、白磁(碗)、被熱礫、礫
SK47	鉄石英荒割品、炭
SK48	須恵器(杯)、越中瀬戸焼(壺)、礫
SK51	弥生土器、土師質土器(小皿)、伊万里焼(碗)、骨片、炭
SK54	弥生土器、炭
SK55	弥生土器(甕)、珠洲焼(甕)、弥生土器ｏｒ土師質土器、礫
SK67	弥生土器(高杯)、須恵器(甕)、土師器(皿)、珠洲焼(甕・片口鉢)、土師質土器(小皿)、青磁、被熱礫、炭、骨片、礫
SK73	越中瀬戸焼(水差し又は建水)、近世陶磁(擂鉢)、礫
SK75	土師器(椀)、土師質土器(小皿)、越中瀬戸焼、礫
SK88	礫
SK89	須恵器?、土師器ｏｒ土師質土器、越中瀬戸焼(丸皿)、鉄製品
SK96	弥生土器?、須恵器(杯)、青磁(碗?)、土師質土器、越中瀬戸焼(丸皿・ひだ皿・緑釉碗?)、炭、礫
SK98	弥生土器(高杯)
SK106	須恵器(蓋?)、珠洲焼(片口鉢)、土師質土器?、越中瀬戸焼(碗)、柱根石、礫
SK107	弥生土器(甕・壺・高杯)、須恵器(蓋)、筋砥石、被熱礫、礫
SK108	珠洲焼(片口鉢)、越中瀬戸焼、礫
SK111	弥生土器
SK112	弥生土器
SK117	弥生土器、須恵器(蓋)、越中瀬戸焼(丸皿・擂鉢)、柱根石、礫
SK118	砥石
SK120	弥生土器(甕・高杯・器台)、須恵器(杯・甕)、珠洲焼(壺ｏｒ甕・片口鉢)、越前焼?、土師質土器、越中瀬戸焼(丸皿・中皿・向付・碗・鉢・壺・擂鉢・匣鉢・匣鉢蓋)、伊万里焼(碗)、漆塗椀、板状木製品、棒状木製品、加工材、竹、炭、ヒスイ勾玉未成品、ヒスイ片調品、被熱礫、礫

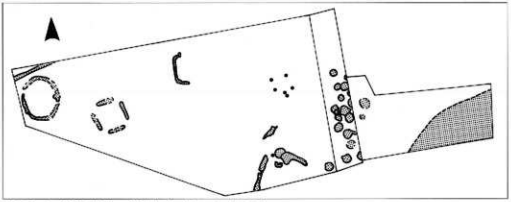
遺構番号	出土遺物
SD01	弥生土器(甕・壺・高杯)、珠洲焼(甕・片口鉢)、越中瀬戸焼(丸皿・中皿・向付・碗・鉢・擂鉢・壺)、伊万里焼(碗)、磁器(碗)?、石製円板、石英?、被熱礫、礫
SD02	弥生土器(甕・壺・高杯・赤彩高杯)、須恵器(蓋)、珠洲焼(甕・壺・片口鉢)、土師質土器(皿・小皿)、青磁?、ヒスイ剥片、緑色凝灰岩剥片、板片、被熱礫、礫
SD06	有茎石鏃
SD11	弥生土器、須恵器、越中瀬戸焼、近世陶磁、フイゴ羽口、炭、被熱礫、礫
SD16	弥生土器(甕・壺・高杯)、骨片、礫
SD17	弥生土器(甕・高杯)、須恵器(杯・甕)土師器(椀・甕)、珠洲焼(甕・片口鉢)、土師質土器、越中瀬戸焼(向付・碗・擂鉢・鉢)、磁器、炭、被熱礫、礫
SD19	弥生土器(甕・壺)、炭化米、炭
SD20	弥生土器(壺)、骨片、礫
SD23	弥生土器(甕)、炭化米、炭
SD26	越中瀬戸焼(丸皿・向付・碗・擂鉢)、伊万里焼(碗)
SD28	弥生土器
SD29	弥生土器(壺)、須恵器、越中瀬戸焼、礫
SD31	弥生土器(甕・壺)、炭化米、骨片、炭
SD32	越中瀬戸焼(丸皿)
SD33	越中瀬戸焼
SD36	弥生土器(甕・壺?・高杯)、唐津焼?、鉄石英剥片
SD37	弥生土器(甕・壺・高杯)、骨片、炭、加工痕のある礫、礫
SD38	弥生土器(甕・高杯・結合壺)、越中瀬戸焼(壺)、蛇紋岩原石荒割品、礫
SD39	弥生土器(高杯)、ガラス小玉
SD45	弥生土器
SI01	弥生土器、須恵器(杯)、越中瀬戸焼(丸皿・碗・擂鉢)、被熱礫、礫
SI02	弥生土器(甕・壺・高杯)、須恵器(杯・蓋・甕)、珠洲焼(甕・壺・片口鉢)、土師質土器?越中瀬戸焼(丸皿・ひだ皿・皿・向付・碗・擂鉢・壺・匣鉢)、肥前陶器(緑釉碗)、磁器、漆塗木製品、板状木製品、砥石、炭、被熱礫、礫
SI04	弥生土器(壺)、須恵器(無台杯・壺・小壺)、珠洲焼(甕・壺・片口鉢)、土師質土器(小皿)、漆塗木製品、骨片、被熱礫、礫
P12	弥生土器、礫
P28	弥生土器、礫
P32	弥生土器(甕)、蛇紋岩製勾玉未成品、ヒスイ剥片、緑色凝灰岩剥片、蛇紋岩剥片、砥石?、炭
P33	弥生土器(高杯)
P34	弥生土器、ヒスイ剥片、緑色凝灰岩剥片、蛇紋石剥片、鉄石英剥片、礫
P48	弥生土器
P49	弥生土器
P53	礫
P62	越中瀬戸焼(丸皿・皿・ひだ皿・壺)
P69	礫
P73	弥生土器、越中瀬戸焼、被熱礫、礫
P77	越中瀬戸焼(向付)、礫
P78	弥生土器、礫
P79	弥生土器、礫
P80	弥生土器(台付壺)
P81	弥生土器(壺)、礫
P82	弥生土器、礫
P84	礫
P87	礫
P88	珠洲焼、柱根石
P97	珠洲焼(壺?)、土師質土器
P105	弥生土器、越中瀬戸焼(中皿)、被熱礫、礫
P119	礫
P130	漆膜、緑色凝灰岩剥片、メノウ剥片、礫
P133	弥生土器、土師質土器?、越中瀬戸焼(丸皿・中皿・向付)、礫
P138	弥生土器、越中瀬戸焼(丸皿)、礫
P139	弥生土器(甕など)、砥石
P141	弥生土器
P142	弥生土器、筋砥石、蛇紋岩剥片
SX05	鉄塊、礫

Ⅳ　まとめ

今回の調査で清水堂南遺跡の集落南半部の様相が明らかになってきた。後世の耕作等により削平を受けているものの、同一遺構面に弥生時代後期～終末期、鎌倉～室町時代、江戸時代の3時期の遺構が一部切り合いを持つものの存在している。ここでは、時代ごとにその特徴を掲げておくことにする。

弥生時代の集落

平成７年度の試掘及び発掘調査で、今回の調査区の南西部に集落の南端を画する大溝あるいは、蛇行して流れていた白岩川の旧流路によって形成された谷地形が存在していた。今回の調査区はその北側の沖積平野部上に形成された集落の西端部に、方形周溝墓１基と円形周溝墓と考えている円形周溝状遺構が並立していた。



第24図　弥生時代の遺構図（Ｓ＝1／1000）

方形周溝墓の東西を区画する溝の各々の中央部付近から壺形土器が１点ずつ出土している。東のＳＤ19から出土した壺形土器は、頸部から上を欠いており、表面の摩滅が著しく明瞭ではない。所々赤彩の痕が観察される。出土状態は、溝が約10cm程埋まった段階で、頸部から上を欠いた部位が下になった状態で出土した。あたかも底部穿孔の壺が据えられていたかを思わせる状況を呈している。溝を掘削した土を盛り土し形成されていた墳丘部上に供えられた土器が、転落し、溝内に収まった状況も考えられるが、同溝内や周辺部からは、頸部から上部の接合資料を見出すことが出来ず、口縁部を欠いた壺形土器を逆位に置いた可能性も考えられる。

一方西のＳＤ20から出土した壺形土器も溝がやや埋まった段階で出土している。横転した状態で検出していた。壺形土器の形態もやや特殊な形態を呈している。

円形周状溝遺構は、周溝で区画された内部に同時期の柱穴等が確認されず、溝の一旦が途切れる平面形態を取る。溝も削平を受けてはいるものの、最大幅約１ｍを測る、平面形態はやや隅丸方形に近い歪なものであるが、円形周溝墓の範疇として捉えたい。

県内には、富山市杉谷Ａ遺跡の方形周溝墓と円形周溝墓が並立して丘陵南東部の平坦面に位置している例がある。今回検出された周溝墓は、平野部に立地しているため、それら平野部の開発に携わった首長の墓と考えられる。

平成７年度調査の際に、直径1.5～2.3ｍを測る大型円形土坑が19基まとまって検出されていた。同様の円形土坑については、貯蔵穴説と墳墓説、水溜説がある。ここで検出された土坑については、立地条件や、出土遺物、埋土の状況から墓穴ではないかと考えている。一方今回検出された周溝墓２基は、それら円形土坑群から西に約70ｍ距離を置いて見つかっている。仮に円形土坑が墓穴だとすると、円形の墓に葬られた人と、溝で区画された中に葬られた人との間に格差の生じていたことが類推されよう。周溝墓に葬られていた人物をこの集落のリーダーである首長と考え、円形土坑には集落の一般構成員が葬られていたものと想定したい。

平成10年度の調査では、集落の東寄りの地区に大量の弥生土器を包蔵する溝などが検出されている。このため集落の東側に生活域が所在し、今回の調査区のある集落の西寄りの地区は墓域という集落構造が復元できるのではないか。（鹿島）

弥生時代の玉作り

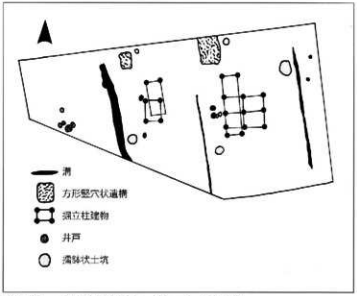
平成７年度調査、平成10年度調査に続いて11年度調査でも玉作り関連の遺物が出土した。清水堂南遺跡で製作されていた玉はヒスイ・蛇紋岩製の勾玉、緑色凝灰岩・鉄石英製の管玉が主だったようである。11年度調査区では製作工程を明瞭に示す資料の出土はなかった。

玉作り資料の出土遺構をみるとP32が圧倒的に多い。その他ではP34、P130、P142などP32周辺の弥生時代の柱穴状ピットからの出土が多い。P32・33・34・130・142を柱穴とする竪穴式住居が存在した可能性も考えられる。玉作り資料の出土は、紛れ込みによる中・近世の遺構からの出土も含めて全て調査区の東半に限られる。調査区東側に玉作り工房を含む生活域があったことが推察される。しかし、中近世の遺構による破壊や後世の全体的な削平によってその全体像を把握することはできなかった。（安達）

中世の集落

鎌倉時代から室町時代にかけての大溝が２条検出された。西の溝は、Ｌ字形に区画した中に井戸や方形竪穴状遺構も検出されており、溝で区画された小規模な集落が形成されていたものと思われる。

平成10年度の調査区では中層として護岸の杭列を伴う溝跡や畑跡の可能性のある畝状遺構群を検出している。今回の調査区は井戸や竪穴状遺構が見つかっているため、この時期には遺跡の西寄りに集落が形成され、東側は耕作地といった集落の形態が形成されていたようである。（鹿島）



第25図　近世の遺構図（Ｓ＝1／1000）

近世の集落

近世の遺構では溝によって区画される屋敷割が検出された。SD26をはさんだ東側の屋敷地と西側の屋敷地では規模を変えて同じような施設が同じような位置に配置されるといった特殊な様相がみてとれる。東側の屋敷地では大型の竪穴状遺構（ＳＩ02）、大型の掘立柱建物（ＳＢ03・ＳＢ04）、大型の擂鉢状土坑（ＳＫ120）、井戸（石組井戸を含む）が存在する。西側の屋敷地には小型の竪穴状遺構（ＳＩ01）、小型の掘立柱建物（ＳＢ01・ＳＢ02）、小型の擂鉢状土坑（ＳＫ45）、井戸（全て素掘り井戸）が存在する。これらの遺構は比較的短期間（17世紀後半から18世紀前半）に営まれ並立していたものである。東側は本家的なイエ、西側は分家的なイエとして二つの屋敷地は密接な関係を保有していたことが考えられる。調査区には「与三兵衛屋敷」という字名が残っており関連性が注目される。

遺物の面では、越中瀬戸焼が非常に多く出土したといえる。特に一般の集落からはほとんど出土しない匣鉢の蓋が多く出土したことが注目される。合計で23点出土した（内２点が接合した）。匣鉢の蓋は窯道具であり、焼成時に製品を詰めた匣を積み重ねた上に蓋として被せるほか、重ね焼きの際に

製品の間にはさんで使う。匣鉢は容器として再利用するために一般集落からもよく出土するが、匣鉢は利用方法があまり無いためかほとんど出土しない。

また、中皿や大皿などの大型品で釉薬の発色が良くない不良品が比較的多く出土した。大型の皿自体一般集落からは出土することが少ない。このような様相は生産地との直接的な関係を示唆する。清水堂南遺跡のすぐ南側は白岩川の旧河道であるが、下流側に約850m行ったところに「船附場」という字名が残っている。白岩川を利用して上流立山町の越中瀬戸焼の窯場から製品を運び、清水堂南遺跡周辺を拠点の一つとして、周辺の集落へ供給されたと考えられる。（安達）

参考文献・引用文献

藤田富士夫　1982『玉』考古学ライブラリィ－52

藤田富士夫　2000「越中のクニ誕生①」『富山教育』第841号　富山県教育会

山岸良二編　1991『原始・古代の墓制』同成社

宇野隆夫　1982「井戸考」『史林』第65巻５号

河西健二　1993「越中における様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会

富山市教育委員会　1998『富山市水橋 清水堂南遺跡 清水堂Ｂ遺跡』

越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会　1988『越中瀬戸』発祥四百年記念誌

定塚武敏　1974『越中の焼きもの原始から現代まで』

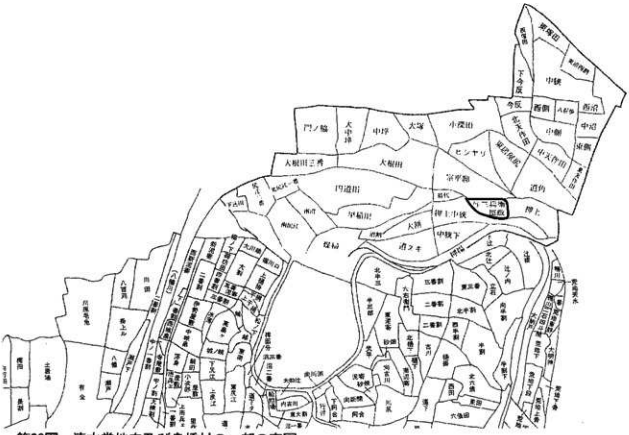
宮田進一　1997「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会

七尾市教育委員会・国分高井山遺跡発掘調査委員会　1984『国分高井山遺跡』

舟橋村教育委員会　1997『塚越Ⅰ遺跡』

富山県教育委員会　1974『小杉町上野遺跡』

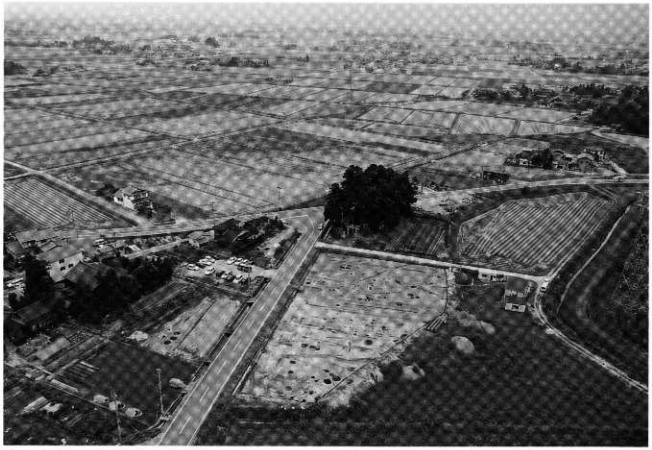
富山県教育委員会・大門町教育委員会　1992『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（２）』



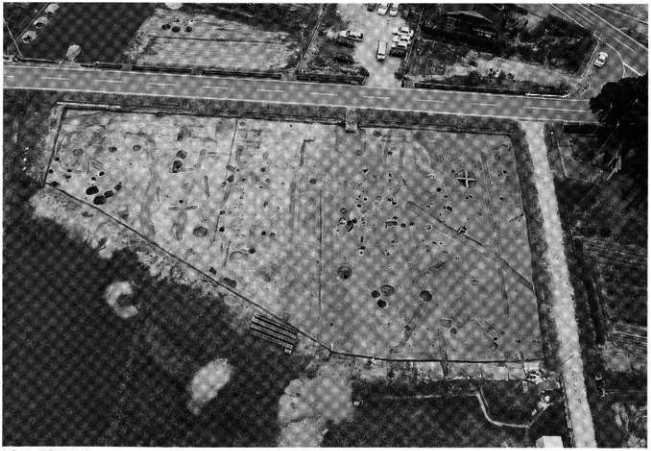
第26図　清水堂地内及び舟橋村の一部の字図

写真図版1

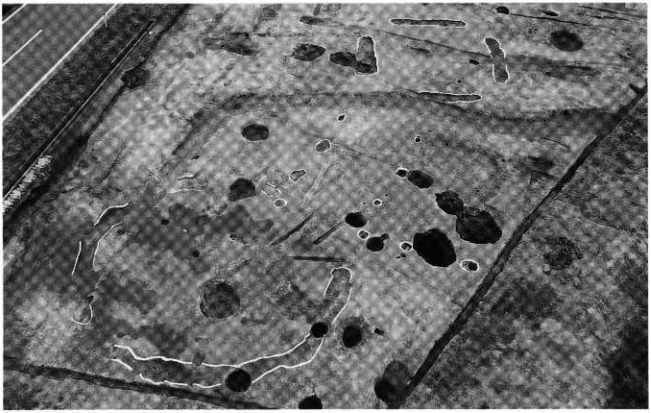
航空写真（1：10,000）



遠景（西から）

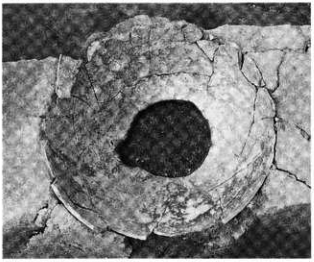


近景（南から）

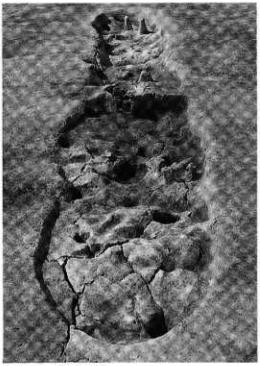


方形周溝墓と円形周溝状遺構（円形周溝墓）西から

方形周溝墓(北から。左右の人の位置から弥生土器が出土)

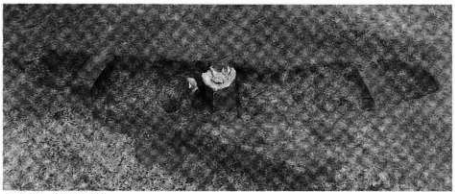


ＳＤ19 出土弥生土器

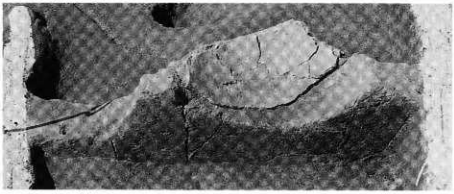


ＳＤ19（南から）

ＳＤ19 土層断面

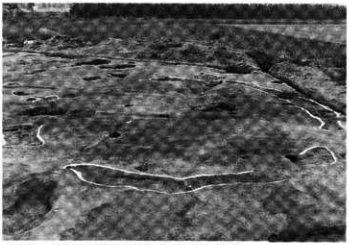


ＳＤ20（西から）



ＳＤ20 土層断面

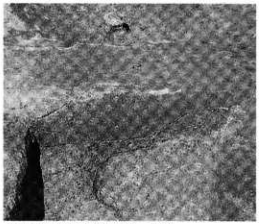
ＳＤ31（南から）



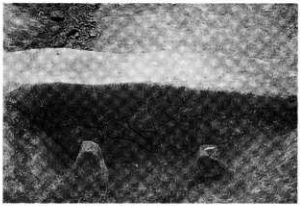
ＳＤ37 円形周溝状遺構（円形周溝墓）

ＳＤ06 石鏃出土状況

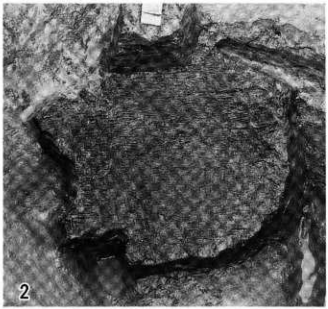
ＳＫ10（北東から）

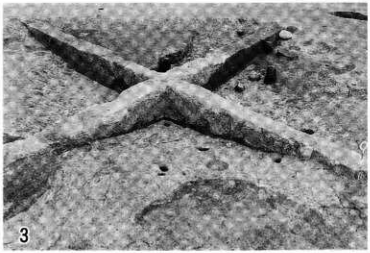


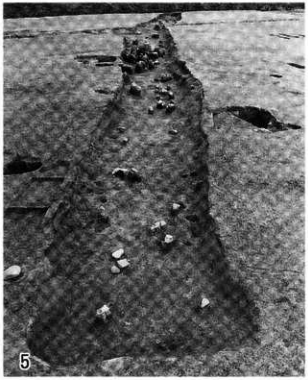
ＳＤ37 土層断面（Ａ－Ａ'）

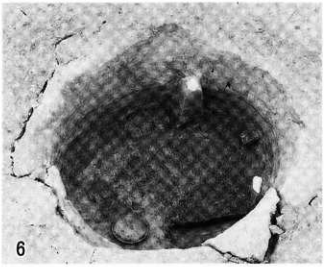


ＳＤ37 土層断面（Ｅ－Ｅ'）

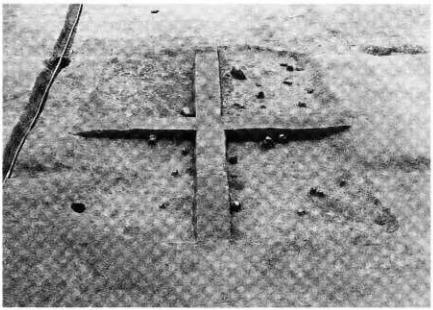






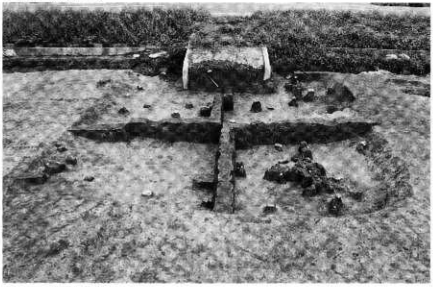


1　ＳＥ１０（西から）
2　ＳＫ０２（編みザル出土状況）
3　ＳＩ０４（西から）
4　ＳＤ１７（南から）
5　ＳＤ０２（北東から）
6　ＳＫ１７（南から）

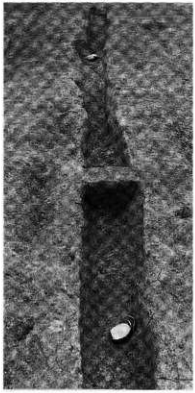


SI01（北から）

SD01（北から）



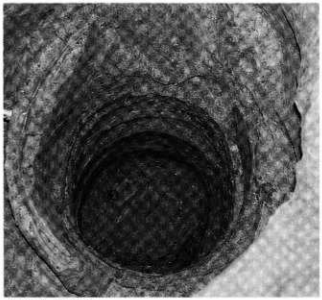
SI02（南から）



SD26（南から）

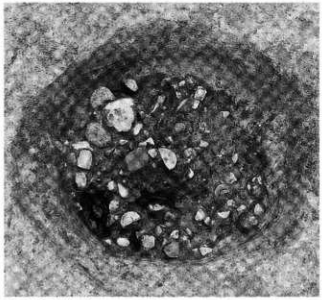
SK120 最下部遺物出土状況（北から）

SK120 遺構掘りの様子▶

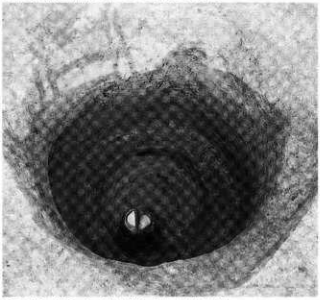


ＳＥ15（曲物）

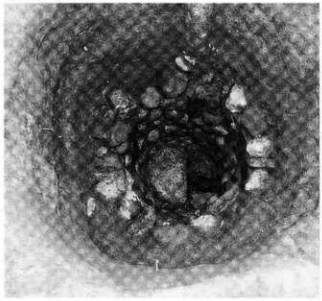
噴砂跡検出状況（ＳＥ19断ち切り）



ＳＥ13（上層）

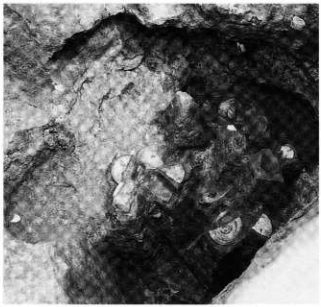


ＳＥ13（最下層越中瀬戸焼向付出土）

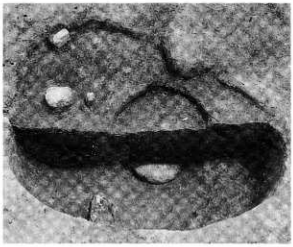


ＳＥ14（石組井戸）

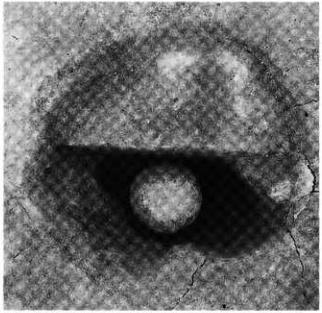
作業風景（ＳＥ13・14・15付近）



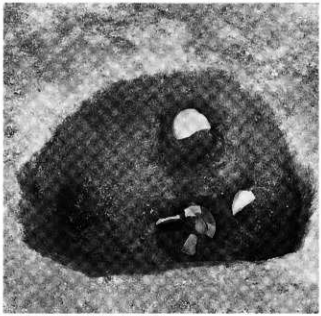
▲ＳＫ106 土層断面
◀ＳＥ12 越中瀬戸焼さや鉢の蓋集中廃棄



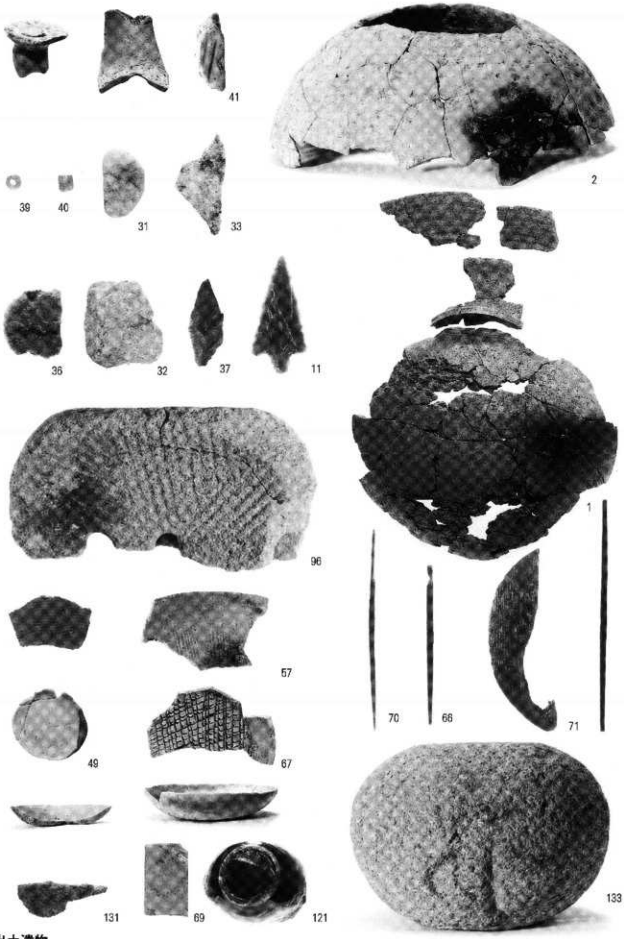
▲ＳＫ07 土層断面
◀ＳＥ21 遺物出土状況



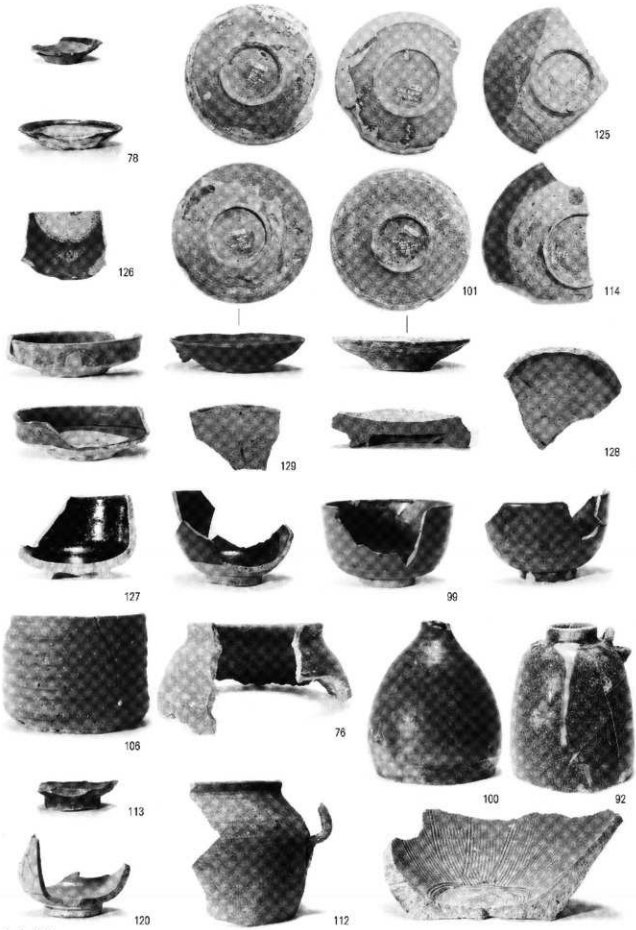
ＳＫ29（柱根石に五輪塔の水輪を転用したもの）



Ｐ62 越中瀬戸焼出土状況



出土遺物



出土遺物

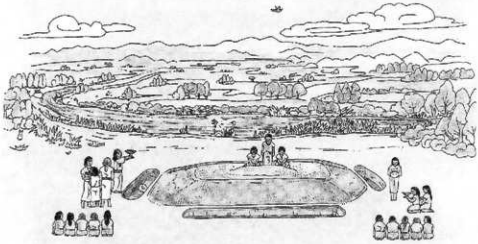
報 告 書 抄 録

書　　名	富山市水橋　清水堂南遺跡
シリーズ名	県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（清水堂地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
シリーズ番号	（5）
編著者名	鹿島昌也　安達志津
編集機関	富山市教育委員会　富山市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒930－0803　富山県富山市下新本町5－12　TEL 076－442－4246
発行年月日	西暦　2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しみずどうみなみいせき 清水堂南遺跡	とやましみずはし 富山市水橋 しみずどうあざ 清水堂字 よさへいえもんやしき 与三兵衛屋敷	16201	245	36度 42分 30秒	137度 19分 00秒	19990524 ～ 19991008	発掘 2530	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水堂南遺跡	集落跡、墓	弥生、平安、中世、近世	円形周溝状遺構、方形周溝墓、竪穴状遺構、溝、井戸、掘立柱建物、土坑、	有茎石鏃、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲、越中瀬戸、近世陶磁器、勾玉未成品、ヒスイ剝片、碧玉剝片、鉄石英剝片、砥石、漆製品、木製品、五輪塔、鉄塊、鉄製品	弥生時代の円形周溝状遺構、方形周溝墓を検出した。

調査参加者スナップ



方形周溝墓埋葬のようす（イメージ図・北から）　　画 近藤顕子

県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業
（清水堂地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要（5）

富山市水橋
清水堂南遺跡

編　集　富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
　　富山市下新本町5番12号
発　行　富山市教育委員会
　　富山市新桜町7番38号
印　刷　とうざわ印刷工芸株式会社
発行日　平成12(2000)年3月31日